

2010年12月24日

中央大学文学部

英米文学研究

第 28 号

目 次

学部卒業論文

- 『The Talented Mr. Ripley』における人間関係の特異性 上野 碧 (3)
- ジュンパ・ラヒリの短編に見る男女関係 高山 敏弥 (21)
- アメリカン・ヒーローの変遷 ～ヒーローの条件～ 廣井 茜 (35)
- Influence of native language on perception of second language speech Masayuki Ota (55)
- 日本人英語学習者の複合名詞句の習得 西海 茉優 (71)

中央大学英米文学会会則
研究室動向／英語文学文化専攻専任教員／編集後記

中央大学文学部英米文学会

学部卒業論文

『The Talented Mr. Ripley』における人間関係の特異性

上野 碧

序論

『*The Talented Mr. Ripley*』はパトリア・ハイスミス (Patricia Highsmith) によって1955年に発表された長編小説である。主人公トム・リプリー (Tom Ripley) はその日その日をどうにか暮らしている貧しい25歳の青年である。彼は造船会社の社長グリーンリーフ (Greenleaf) からある依頼を持ちかけられる。それはトムの友人であり、イタリアにいるグリーンリーフの息子ディッキー (Dickie) を呼び戻してほしいというものだった。グリーンリーフとしては息子に帰国してもらい、家業を手伝ってほしいと考えている。しかしディッキーは父の言葉に耳をかそうともせず、イタリアでの優雅な暮らしを満喫しているらしい。グリーンリーフは旅費は全てこちらが負担し、観光も楽しんで来てくれてかまわないと提案する。さえない現状から抜け出し、新しい人生を歩みたいという願望もあいまってトムは依頼を引き受けイタリアへ向かう。

イタリアに着いたトムはしばらくの間、ディッキーの女友達マージ (Marge) に邪険にされつつも彼の遊び友達として楽しい日々を過ごす。グリーンリーフの依頼をすっぽかして、このままディッキーと暮らそうかという考えも浮かんでくる。しかしそのうちディッキーのトムに対する態度が少しずつ変化していき、しまいには冷たく素っ気無いものになってしまう。これはトムにとって耐え難いものだった。さらにはグリーンリーフからも事務的なお役御免の手紙が届く。

トムは友人だと思っていたディッキーの自分への態度や、グリーンリーフの冷たい対応にショックを受け、自尊心を傷つけられる。失望や怒りに突き動かされたトムは半ば計画的にディッキーを殺してしまう。その後トムはディッキーになりすましたり、トムに戻ったりしながら、警察やマージらディッキーの友人の目をごまかす。いつ自分の犯罪がばれやしないか怯え、もう一件の殺害事件をおこすなど、危ない橋をわたりつつトムは周囲の目をやり過ごしてゆく。

本稿ではこの作品の登場人物同士の特異な人間関係について論じていくことにする。まず第1章ではディッキーを中心とした三角関係について「ホモソーシャルリティ」という概念を参考に考察する。続く第2章では、トムとディッキーの女性および保護者 (親) との関係における特徴について述べる。そして第3章にて、第1章と2章における考察を参考にして、本作品が示す人間関係の矛盾点と可能性について論じる。

第1章 ディッキーをめぐる三角関係

トムのディッキーに対する感情を探っていくうえで無視できないのが、マージの存在である。マージはディッキーに恋愛感情を抱いているが、ディッキーは彼女のことを退屈と淋しさを紛らわす遊び相手ぐらいにしか考えていない。彼らが住んでいるイタリアの村、モンジペロには他にアメリカ人は誰も定住していない。特に冬の間は閑散としてしまい、訪れる観光客もほとんどいないのだ。このような背景もあり、マージはディッキーにとって退屈な冬の遊び相手でしかなく、そんな二人の間にトムが割り込

んでくるのである。

ニューヨークで食い詰め、思いがけぬ幸運によってイタリアにやってきたトムはディッキーの父親からの依頼などそっちのけで、ディッキーに気に入られ、心底親しくなってこのまま住み続けたいと望むようになる。この結果、三人の関係はディッキーに気に入られようとして、トムとマージが張り合う奇妙な三角関係を呈することになる。

本章ではこの三角関係を中心にして、「同性愛」と「ホモソーシャリティ」といった概念をもとにトムのディッキーに対する感情について探っていくことにする。

1.1 トムは同性愛者なのか？

それまで良好だったディッキーのトムに対する態度がそっけないものに変化する主要な原因は、マージとディッキーがトムは同性愛者、つまり男性を性的愛情の対象としているのではないかという疑いを抱いたことにある。

確かに作中、トムにはホモセクシャルな印象を与えるような言動がたびたび見られる。女性であるマージをのけ者にして、ディッキーと二人きりで外出しようと画策する様子がたびたび見受けられる。彼女の下着に対して嫌悪感を覚える描写もある。“‘Sure it is. I like girls’ Tom said protestingly”（「たしかに、そうだ。俺は女好きだ」とトムはしぶしぶ言った）（68）という記述があること。さらにトムには、性的関係は無く全員と絶交し、今では関わったことを後悔しているとはいえニューヨーク在住中に男性同性愛者のグループと付き合いがあった。その際に話題提供のためと言いつつ、“I can’t make up my mind whether I like men or women, so I’m thinking of giving them *both* up”（自分は男と女のどちらが好きなのかハッキリと決められない。だから、どちらもあきらめようと考えている）（80）といった発言をしている。そもそも彼の周辺にはいわゆる女の匂いがしない。ニューヨークにはただ一人気の置けない女友達のクレオ（Cleo）がいて、彼女の部屋に何度も泊まり並んで寝たこともある。しかし男女の関係には至らず、それを期待しないところがクレオの素晴らしいところだと思っている。

そしてもっとも印象的なのはディッキーがトムよりマージを優先する態度行動を取った際に、トムがディッキーの服を身に付け彼になりきり、マージをふるという一人芝居をする場面であろう。トムはディッキーに自分が彼の服を身にまとっている姿を目撃される。そして元々マージがトムは同性愛者ではないかと発言していたこともあいまって、ディッキーはトムのこの姿を見て自身もその疑いを強くしたことがうかがえる。

こういった描写の数々は読者にトムは異性（女性）に性的愛情を抱かない、同性愛者であるという疑いを与えてもおかしくはない。しかしこれだけでトムは同性愛者であると決め付けてしまうのは、いささか早計な気もする。彼は自分自身、あるいはディッキーが同性愛者ではないかという疑いをかけられた際には激しい怒りを感じ、時には“stinking, filthy suspicions”（不快なことこのうえない、汚らわしい疑い）（140）といった表現まですることから同性愛に対する嫌悪感があることがうかがえる。ニューヨークで付き合いのあった同性愛者のグループの内の二人に言い寄られた際には、きっぱりとはねつけている。その後仲直りをするために彼らに気を利かせた行動をとってはいるが、性的関係には至っていない。そもそも同性愛者のグループとは、独りになることを恐れてしかたなく付き合っていたとトムは述べている。ではトムのディッキーに対する強い思い入れは同性愛によるものでないとしたら、何に起因するものなのであろうか。

1.2 ホモソーシャルな関係

男性同士の関係を表す概念で前出のホモセクシャリティ（男性同性愛）とは別に、ホモソーシャルというものがある。ここではこのホモソーシャルという観点から、トムの考えおよびディッキーとの関係を探ってゆきたい。

ホモソーシャルとは、イヴ・K・セジウィック（Sedgwick, Eve Kosofsky）が社会学用語から流用した分析概念である。ここでは、四方田犬彦らによる説明を参照にしながら、基本的な枠組みを説明しておきたい。「それは（男女を問わず）同性同士の排除的な絆をもつぱらとし、異性をその強化確認のために利用するシステムであり、にもかかわらずそこではホモセクシュアリティだけは厳密に禁忌とされている」（四方田 9）

この理論を提唱したセジウィックは「ホモソーシャル」という言葉を「ホモセクシャル」との区別と、隠された連続性を表すために使っている。男性中心の社会制度においては女性だけを性的な対象とし、男性同士のエロスを排除した均質な関係を維持することで制度の安定が保持される。しかし男性ふたりが、一人の女性に性的欲望を向けるとき、しばしば両者是对立・競争関係に入る。これがエスカレートすると男性ふたりは危険な状態に陥る。それを回避するための譲歩と調停がなされ、結婚という形で女性を制度内に回収することで男性社会の安定をはかるのである。このメカニズムがうまく機能する背後には、女性を客体化して性的な関係にするというミソジニー（女性嫌悪）と、男性同士が欲望の対象になってはならず、異性愛が強制されるという心理が働いている点が重要である。ホモセクシュアルな関係は、男性同士の均質な関係を攪乱する要因となるので、排除されることになる（ホモフォビア＝同性愛恐怖）。（四方田 134）

男二人が女一人を求めて競争関係に入る。だがこうした場合、どちらかの男が身を引く。これは競争という擬似同性愛関係を捨て、異性愛の尊重へと移ることではなく、女性の交換と流通によって男性関係を確固たるものにすることである。いいかえればこれは、男がそれぞれパートナーを作ることによって、男同士の共倒れの破局を回避することである

（大橋）

「つまり〈ホモソーシャル〉は、同性愛に至ることなく男性間の関係の親密さを維持する体制なのである。その意味で〈ホモソーシャル〉は、「父権制社会の中心的維持装置と考えられる」（飯田 196）しかしそれは単純に物理的に女性がいない男性だけの世界を意味するのではない。女性は構造的に排除されると同時に、必要不可欠な条件として機能するのだ。女性達は男性同士の共同体の安定を脅かす異分子として抑圧し排除すべき存在としてみなされる。一方で欲望の対象・交換可能な媒体として働きホモソーシャルな社会における潤滑油の役割を果たすのだ。その意味においてホモソーシャル体制は、異性愛に支えられているといえるだろう。

トムがマージを排除し、ディッキーとのみ良好な関係を築くことを望んでいる点は「ホモソーシャルな欲望」に合致しているように見受けられる。またトム、ディッキー両者に見られるホモフォビア的な感情も説明が付く。

しかし、この作品における三角関係はホモソーシャルの基本概念には当てはまらないのである。三角関係の基本的な構造は一人の女性をめぐる二人の男性が競争関係にある（逆もまたしかり）というような、異性をめぐる同性同士の争いである。この作品では一人の男性（ディッキー）を、女性と男性（マージとトム）が取り合う関係になっている。トムもディッキーもマージを性的愛情対象とみなしておらず、彼女を邪険にすることはあるものの、彼女をめぐるライバル関係に陥ることもないため厳密な意味での「ホモソーシャル」には当てはまらない。

飯田裕子の論文などからホモソーシャル的三角関係において、女性を欲望の対象とはしないケース（将来の目標、世界や文学といった概念）も考えることができる。しかしトムとディッキーが何を欲望の対象として競争・対立関係にあるのかと問われると、答えに窮してしまう。

セジウィックの理論は18世紀中頃から19世紀中頃にかけてのイギリス文学という特定の時代と地域文化の文脈を前提にしている。近現代アメリカ小説に分類される本作品でホモソーシャル論を展開しようと思えば、すぐにでもいくつかの文化的・歴史的差異が問題になってくるだろう。（現在すでに多くの作品において、たとえば日本なら夏目漱石の作品やヤクザ・仁侠映画などでこのホモソーシャル論観点からの読みがなされてはいる。その際にも、日本の男色文化などを考慮に入れた分析が行われている。）この点に関しては続く第2章における観点も含めて第3章にて考察していきたい。

ともかく欲望の対象である女性の交換を伴わないものの、トムにはディッキーとホモソーシャルな関係（ここでは、単純に女性を構造的に排除し男性同士の絆を深めることと定義する）を築くことを望んでいると考えてよいのではないか。トムは同性愛者であるという見解よりは適切ではないだろうか。彼は男性と性的関係に至ったことは一度もないし、そうなりそうな機会に遭遇してもキッパリと拒否をしている。彼の心情や言葉だけをみれば同性愛者だという考えに至るかもしれない。しかし実際の行動に表れることはしていないため、彼を同性愛者であると断定することはできないだろう。

第2章 保護者と女性との関係からみられる成熟からの逃避

本章では主要登場人物であるトムとディッキーの保護者（親）や女性との関係における共通点をみてゆくことにする。そしてこの共通点から二人の願望を探ってゆくと同時に、彼らの精神的あるいは経済的「自立」について考えてゆきたい。

2.1 トムとディッキーの人間関係における共通点

作中ではトムが自分とディッキーの身体的特徴の共通点を意識する描写が何度も登場する。このことが、トムがディッキー殺害後に彼に成りすます要因および複線になっていることが考えられる。ところでトムとディッキーには、この身体的特徴の共通点の他にもその人間関係においていくつかの共通点が見受けられる。

第一に二人とも状況は異なるものの、保護者（親）との関係を原因とした一種の家出状態にある。トムは幼いころに両親を失い、その後はボストンに住む叔母のドッティ（Dottie）のもとで育てられた。しかしトムとこのドッティはどうも馬が合わなかったらしい。トムはドッティの自分に対する屈辱的な言動の数々に優しさや愛情を感じられなかったと思い返し、四六時中彼女を憎んでいたとも述べている。八歳のころからすでに彼女のもとを離れる決心をしていたようだし、彼女に対して殺意を抱き暴力をふ

る場面を想像することもあった。そして 20 歳の時に家出をするのだ。一方のディッキーであるが、こちらは父親との関係が原因で家出状態にある。すでに述べたように父親は彼に自分の会社で働き、後を継いでほしいと考えている。しかしディッキーにその気はなく、再三にわたる帰国の要請にも耳を傾けようとはしない。母親が病床にあり余命が一年たらずしかないにも関わらず、本当に危険な状態になったら帰ればよいというような発言をしている。

このように彼ら二人は保護者との関係が原因で家出状態にあるのだが、その家出は完璧なものではなくなんと中途半端である。

まずトムは 20 歳の時に念願かかってドッティのもとを離れているのだが、完全に縁を切ったわけではない。なぜなら、金銭的に困窮しているトムはドッティが気まぐれのように送ってくる中途半端な額の小切手を無下にすることができないからである。その後、ディッキーを連れ戻すためにイタリアへ渡る彼は二度とニューヨークに戻ってくるつもりはないと思っている。今までのさえない過去を捨て去り、人間関係を清算できることに喜びを感じている。ここでドッティと完全に縁を切ると豪語しているのだが、そういきれるのは新たな経済的援助者であるディッキーの父、グリーンリーフの存在があるからであろう。

一方ディッキーは経済的には父からの援助を受けず、自分自身の収入を得ているようである。ただ会社勤めをしている様子はなく、どうやら投資信託による収入らしい。自分の仕事の件については父と話が付いていると述べているものの、完全な合意状態にあるわけではない。父の希望に沿うつもりがないのは明らかだが、彼を完全にはねつけ絶縁状態に持ち込むことはなく写真や手紙を定期的にやり取りしていることが伺える。画家になりたいために父の会社を継ぐ気はないとのことだが、実際のところ真面目に修行に取り組んでいる様子もないため、単なる趣味を都合のよい言い訳に使ったとしか感じられない。

第二の共通点は、非常に近い関係にありながら性的関係を持たない女性がいることである。トムはクレオ、ディッキーにはマージである。クレオについてはハッキリと推し量ることができる記述はないが、マージに関しては相手役のディッキーに対する恋愛感情が明らかに感じられる。トムはクレオと性的関係をもつつもりはないと考えている。ディッキーも気晴らし相手であるマージの気を引くために抱きしめたりキスをしたりすることはあるものの、性的関係をもつ気はないようだ。トムが彼とマージのこの関係に言及した際には次のような言葉を述べている。“**That’ exactly right. I haven’t been to bed with her and I don’t intend to, but I do intend to keep her friendship**”（それはまさにそのとおりだ。自分は今までマージと寝たことはないし、これからもそのつもりはない。けれど、友達としての関係は続けていくつもりだ。）（81）しかし、この後ディッキーはマージとの関係を強めていく。彼の家以前よりも頻繁にマージが出入りするようになる。また彼は今まで必要ないといっていた冷蔵庫を購入しに行き、トムにいわせるとその際にまるでマージと新婚夫婦のようなやり取りをする。冷蔵庫はディッキーがアメリカの実家に戻らずにモンジベロにとどまることを象徴するものとトムは見なしている。ディッキーのこれらの様子は彼がマージと恋人関係になることを考え始めているからと受けとることもできる。だがトムを遠ざけるためだけにマージとの親密度を高めており、トムが去った後はまた今まで通りの関係に戻すのではないかと考えることも可能である。

以上のようにトムとディッキーには「そりが合わない保護者を原因とした中途半端な家出」と「性的関係を持たない女性がいる」という共通点がある。

2.2 アメリカ小説における「成熟」からの逃避

この小説が出版されたのは1955年である。ステファニー・クーンツ (Coontz, Stephanie) は『家族という神話』の中でこの作品が書かれた1950年代のアメリカ合衆国における特徴の一つとして家族主義を挙げている。家庭に大きな価値が置かれ、家族のために消費することが社会の安定と正当性を証明する手段であると考えられるようになった。ファミリールーム、ファミリーカーなどの言葉が生まれた。男女ともに早婚になり、ベビーブームが起きた。統計をみると、1920年の平均初婚年齢は男性が24.6歳、女性が21.2歳であったが、1950年のそれは男性が22.8歳、女性が20.3歳となり、1955年には男性が22.5歳、女性が20.1歳まで若年化している。しかしその後1960年に入るところには平均初婚年齢は逆に上がってくる。1950年代アメリカは「百年ぶりに結婚年齢と出産年齢が低下し、出産率が上昇、離婚が減り、男女の学歴差が大きく開き、生涯独身を通す人が急激に減り、その減り方はそれまで半世紀かけて減ってきた割合とほぼ同じであった。」(クーンツ 48) またクーンツは1950年代のミドルクラスの男性はその地位にふさわしい伴侶に恵まれなければ昇進は望めないし、職を失う恐れさえあったと述べている。独身男性は「未熟者」、「幼児的」、「異常」あるいは病的とさえ言われたようである。

ディッキーは父親が造船会社の社長であることなどから、ミドルクラス以上に位置することがうかがえる。その場合、25歳男性である彼は1950年代において望ましいとされた男性モデルからは逸脱していることになる。描写の中心がトムであることに加えイタリアという外国に居るためか明言されることはないが、結婚願望が伺えないどころか女性と親密な関係になることを避け、定職にもつかないディッキーは1950年代のアメリカ的観点から言えば十分に「普通から外れた人」とみなされるのだ。同性愛者と思われる可能性だってある。

彼らが女性と関係を持つことを避けているのはなぜであろうか。単純にクレオやマージが好みのタイプではなく、ほかに良い女性がいたらその女性と性的関係を持つだろうと考えることもできる。あるいはこの作品なら、前章でも触れた女性に性的愛情を感じない同性愛者的な要素も考慮できるかもしれない。しかしここでは、「成熟からの逃避」という観点から考えていきたい。

レスリー・A・フィードラー (Fiedler, Leslie A) は『アメリカ小説における愛と死』において、アメリカの作家が恐れているのは、何よりも「成熟」であると述べている。フィードラーの見解によれば、ヨーロッパの作家が結婚を「救済」と考えているのに対し、アメリカの作家は結婚を「成熟」のしるしとしてとらえている。「結婚は伝統的に、分裂した自我との和解、理性と感性の休戦協定だけでなく、社会との妥協、責任と骨折り仕事と退屈の受容を意味するのである」(フィードラー 370) さらに結婚は母を女性として非難することにつながり、子ども時代の放棄とみなされているとも述べている。

フィードラーの見解を参考にすれば、トムがクレオと性的関係を結ばず、マージを邪険に扱い、同性同士の関係強化に注力するのは、「成熟からの逃避」とみなすこともできる。マージと性的関係を結ぼうとしないディッキーについても似たような考えに至ることができるだろう。同様に保護者からの中途半端な家出も、完全なる精神的および経済的な自立を避ける行為、つまり「成熟からの逃避」と考えることができないだろうか。

最終的にトムへ疑いがかけられることもなく、ディッキーは失踪か自殺ということで落ち着く。それどころか、捏造したディッキーの遺書により彼の遺産も手にいれる。そのためトムはしっかりとした勤

め先と家庭を持った状態としての「自立」はしないものの、もともと達成されていた女性（クレオ）との別離と資金を得ることによる経済的な安定を保ったうえで保護者からの逃避を可能にしている。ディッキーを殺害後、彼に一時的に成りすまし、その人生を捏造し利用することで彼は「成熟からの逃避」を成し遂げたのである。ディッキーも死亡したことによりこれ以上年齢を重ねることはもちろん、結婚し家庭をもつ可能性がなくなったため、皮肉にもある意味でトム以上に完全なる「成熟からの逃避」を達成するのである。

第3章 新たなホモソーシャルリティの可能性

本章では、第1章で扱った「ホモソーシャルリティ」、第2章の「成熟からの逃避」という視点をういてトムを中心とする人間関係についてより深く考え、この作品における人間関係の特異性をみてゆくことにする。そしてその矛盾点と新たなホモソーシャルリティ概念の可能性について論じていきたい。

第2章で触れたフィードラーの見解を参考にすれば、トムがクレオと性的関係を結ばず、マージを邪険に扱い、同性同士の関係強化に注力するのは、セジウィックらの言う男性中心の社会制度の安定を図るためだけではなく、「成熟からの逃避」を求めているからであるとみなすこともできるのではないかと。つまり、「成熟からの逃避」をするために男性同士の絆を深めるホモソーシャルな関係を築くのである。

しかしこのように考えた場合、ある矛盾点が浮かび上がってくる。セジウィックの説くホモソーシャルリティにおいては、結婚などによる女性の交換と流通によって男性関係を確固たるものにするとしてされている。ホモソーシャルリティは基本的に異性愛体制であり、ある意味異性愛を維持するための装置とも言える。そしてホモソーシャルリティは、男性が「成熟＝結婚し家庭をつくること」を前提としているのだ。このためホモソーシャルな関係構築を望む動機に「成熟からの逃避」を含むトムは矛盾を抱え込むことになってしまう。

第1章でも指摘したように、本作品における人間関係は典型的な構造、いわゆるセオリーからは多少逸脱している。まずディッキーをめぐる三角関係も通常の「二人の同性同士による一人の異性をめぐる競争関係」とは異なっている。そしてセジウィックによるホモソーシャルリティの概念を用いてトムとディッキーについて考えた場合も、この奇妙な三角関係のために逸脱が生じてしまうのだ。

このため女性（マージ）の交換を行う正しいホモソーシャル関係を構築しなかったため、トムとディッキーの関係は崩れてしまったのではないかと考えることができる。マージをめぐる三角関係になる可能性もありえた。しかし彼女がトムの好みとは外れていたことや、彼がグリーンリーフの依頼を遂行するためにはディッキーに好かれなければならない状況もあり、ディッキーをめぐる三角関係になったのかもしれない。

しかし典型的なパターンから外れているということが、新たなホモソーシャルリティの可能性を感じさせてくれる。一見矛盾しているようにみえる「成熟からの逃避を目的としたホモソーシャルリティ」も存在するのではないだろうか。このように考えられる背景には、本作品が発表された1950年代におけるアメリカを取り巻く状況がある。第2章のクーンツの項でも触れたが1950年代アメリカは、家族やジェンダー、政治において作られた価値観が非常に強い影響力をもっており、それに沿わない人々は非難された。結婚し家庭を持ち、男性は家族における経済的・性的権威者として、女性は良妻賢母としての役割を果たすことが求められた。こうした抑圧には次のような背景があったとクーンツは述べている。

冷戦下の心理的不安が、家庭生活におけるセクシュアリティの強化や商業主義的社会に対する不安と交じり合った結果、ある専門家がジョージ・F・ケナンのソ連封じ込め政策の家庭版と呼ぶ状況を生み出したのである。絶えず警戒を怠らない母親たちと「ノーマル」な家庭とが、国家転覆を企む者への防衛の「最前線」ということになり、反共産主義者たちは、ノーマルでない家庭や性行為を国家反逆を目的とした犯罪とみなした。FBI やその他の政府機関が、破壊活動分子の調査という名目で、前例のない国家による個人のプライバシーの侵害を行った。さらに、アカ狩りと同じくらい悪質で大規模な同性愛者への迫害が行われた。(クーンツ 59)

この価値観に適合し幸せな生活を送る人もいたが、この価値観に違和感を感じ苦しむ人々も数多く存在した。女性の交換と同性愛嫌悪による父権制社会の中心的維持装置とされるホモソーシャリティは、この家族を至上のものとする 1950 年代においてまさに歓迎される装置であると考えられる。だがトムは、フィードラーの説くアメリカ小説における「成熟からの逃避」という素地に加え、1950 年代のアメリカ社会における家族至上主義という価値観に対する違和感によって「成熟からの逃避を目的にしたホモソーシャリティ」を望んだのではないだろうか。セジウィックによるホモソーシャリティを「従来型」として、1950 年代アメリカ社会に適合するにふさわしいものとするならば、トムが構築しようと奔走したものは 1950 年代アメリカ社会から逃避するための「逸脱型ホモソーシャリティ」と考えることができるかもしれない。

またセジウィックは性的愛情をとまなうホモセクシュアルと区別するためにホモソーシャリティという分析概念を提唱した。しかし二つを完全に別物とみなしているわけではない。そこには類似や共通点が見られると述べている。

男性にとって最も好ましいと認められるホモソーシャルな絆と、最も忌むべきものと非難される同性愛を比べると、両者には往々にして重大類似や共通点が認められる。たとえば、二十世紀のアメリカ社会に生きる私たちが、アメリカン・フットボールの試合や、友愛会や、ボヘミアン・グローヴや、戦争小説のクライマックスに起こる出来事をほんの少し視点をずらして眺めてみると、それらは全く驚くほど「同性愛的 (ホモセクシュアル)」に見えるのだ。(セジウィック 136-137)

トムのディッキーに対する感情もこの二つの境界線が曖昧になっているのかもしれない。後々同性愛色が強まるような印象 (衣服を着てディッキーになりきる場面) をディッキーに与えたために関係崩壊に繋がったのではないかと考えられる。もしかすると、人としての在り方にはっきりとした規範を定めそこから逸脱することを良しとしなかった 1950 年代アメリカにおいて、この「曖昧さ」こそトムが求めていたものなのかもしれない。この作品における典型的人間関係からの逸脱は、1950 年代における理想像への疑問符と同時に新しいホモソーシャリティの可能性を投げかけてくれるのではないか。

結論

前章ではこの作品が新たなる「逸脱型ホモソーシャリティ」の可能性を示唆していることを述べた。

しかし同時にホモソーシャルリティを含む全ての人間関係の限界も感じさせるのである。トムが人間関係において得る最終的な結果は、「独り」なのだ。ディッキーに彼の服を着て彼を演じている姿を見られた際の気まずい雰囲気の中で、トムは次のような心情を吐露している。

They were not friends. They didn't know each other. It struck Tom like a horrible truth, true for all time, true for the people he had known in the past and for those he would know in the future: each had stood and would stand before him, and he would know time and time again that he would never know them, and the worst was that there would always be illusion, for a time, that he did know them, and that he and they were completely in harmony and alike. For an instant the wordless shock of his realization seemed more than he could bear. (87-88)

二人は友人なんかじゃない。お互い何一つ分かり合っていないのだ。トムには恐ろしい真実のように思われた。かつての知り合いも、将来知り合う相手も、皆彼の前に立っていたし、これから立つことになるにちがいない。だが、決して相手を知ることはないのだ。それを何度も思い知るだろう。さらにいけないのは、必ずしばらくは相手のことを知ったような気になり、自分達は似たもの同士であり、本当に仲がいいのだという錯覚に陥ることだ。それに気づいたときの言葉にできないほどの一瞬の衝撃は、自分にはとうてい耐えられそうになかった。

トムは作中においてディッキーと自分が似ていることを意識したり、彼の動作を真似ることをたびたび行う。例えば、ディッキーと二人で四輪馬車にのってローマ市内を回っている際に、ディッキーの脚とそばにある自分の脚の上を見ると、鏡を見ている気がしたと感じている。上記の心情から察するに、これらの行為はディッキーと自分の間に絆が存在することを実感するための行為と考えられる。その後ディッキーは自殺したということで世間的には決着がつくが、トムの人間関係に対するこの時感じた絶望が回復する様子は見られない。ピーター（Peter）という青年と知り合い親しくなるが、ディッキーとの関係を思い出しひどく動揺している。

彼はディッキーと逸脱型のホモソーシャル関係を築くために奔走したがうまくいかず、ディッキーを殺害する。さらに成りすましを行っているため誰かと仲良くすると嘘や犯罪がばれて大変なことになってしまう可能性があるため、それが誰であれ付き合いたくても付き合えない状況に陥る。トムはホモソーシャルな関係だけではなく、女性や家族、社会との関係も何一つ築けず、「独り」という結果で終わるのだ。

そしてあんなに執着をみせていたディッキーに対する気持ちも不確かなものである。トムは自分に対して冷淡な態度をとるようになったディッキーへの怒りや失望がきっかけとなって、彼を殺害して成りすますに至る。この際、彼はディッキーに対し悪感情を抱く自分を、次のような考えで正当化している。

He hated Dickie, because, however he looked at what happened, his failing had not been his own fault, not due to anything he had done, but due to Dickie's inhuman stubbornness. And his blatant rudeness! He had offered Dickie friendship, companionship, and respect, everything he had to offer, and Dickie had replied with ingratitude and now hostility. (97)

彼はディッキーを憎んでいた。なぜならこの事態はどう見ても、自分の責任ではない。うまくいかなかったのは自分の失態ではなく、ディッキーの非人間的な強情さが原因だ。それにディッキーの目にあまる無礼な態度！彼はディッキーに友情や仲間付き合い、それに敬意も、必要なものすべて捧げてきた。それなのに、ディッキーは忘恩と敵意で報いたのだ。

ディッキーの露骨な態度にも問題があることは確かだろう。しかしこのトム的心情は、極端な言い方をすれば「両思いでないなら、好きにならない。嫌いになる。」といった身勝手な考えともいえないだろうか。

そしてトムは殺害後もディッキーとうまくいかなかったことを悲しむ一方で、彼の立場や財産、人生そのものをのっとり今までの自分と決別できることを喜んでいるシーンが数多く見られる。物語の最終章にて、殺人の疑いを免れさらには捏造したディッキーの遺書によって彼の遺産を手に入れたトムは驚き喜ぶ。見ようによっては、トムにとって問題だったのはディッキーその人を失ったことよりも、ディッキー（他者）と良好な関係を築けなかったことではないかと受け取れてしまう。彼にとってホモソーシャルな関係を築く相手は必ずしもディッキーである必要はなかったのかもしれない。トムが新たな逸脱型ホモソーシャル関係を築こうと奔走したにもかかわらず、このような思いを持ちながら最終的にたどり着く「独り」という結果をみると、ホモソーシャルな関係はおろか、全ての人間関係とは結局「illusion」なのではないかという思いすら浮かんでしまう。

引用文献

Coontz, Stephanie. *The way we never were: American families and the nostalgia trap*. New York : Basic, 1992.

[クーンツ・ステファニー『家族という神話：アメリカン・ファミリーの夢と現実』岡村ひとみ(訳)、東京：筑摩書房、1998。]

Fiedler, Leslie A. *Love and death in the American novel*. New York : Criterion, 1960. [レスリー・フィードラー

『アメリカ小説における愛と死』佐伯彰一・井上謙治・行方昭夫・入江隆則(訳)、東京：新潮社、1989。]

Highsmith, Patricia. *The Talented Mr. Ripley*. New York: W.W. Norton & Company, 2008.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York : Columbia

UP, 1992. [イブ・K・セジウィック『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀(訳)、名古屋：名古屋大学出版会、2001。]

飯田祐子『彼らの物語』名古屋：名古屋大学出版会、1998年。

大橋洋一「ホモフォビアの風景——ホモソーシャル批評とクイアー理論の現在」『文学』第6巻第1号、1995年、138-145ページ。

合衆国商務省(編) 斎藤眞・鳥居泰彦(監訳)『アメリカ歴史統計：植民地時代～1970年. 第1巻』原書房、1986年。

四方田犬彦・斎藤綾子(編著)『男たちの絆、アジア映画』平凡社、2004年。

ジュンパ・ラヒリの短編に見る男女関係

高山 敏弥

序論

ジュンパ・ラヒリ (Jhumpa Lahiri) はインド出身の両親を持つインド系アメリカ人の作家である。1967年ロンドンで生まれ、幼い頃に渡米して以来アメリカに在住している。ラヒリの短編集『病気の通訳』(Interpreter of Maladies) は9つの短編で構成されている。インド系アメリカ人の日常の出来事が短編集全体のテーマであり、特に大きな事件や人種の優劣を扱っているわけではない。9つの短編の中でも本稿では、短編「病気の通訳」(Interpreter of Maladies)、「セクシー」(Sexy)、「停電の夜に」(A Temporary Matter)の3作品について考えていきたい。

パートナーとの関係がうまくいっていない同士の出会いを描いた「病気の通訳」、若い女性が不毛な不倫に溺れる「セクシー」、若い夫婦がロウソクの灯りの下でかつての親密さを取り戻そうと試みる「停電の夜に」、どの短編も「わけあり」な男女関係が共通のテーマだと考えられる。では、3つの短編の男女が抱えている問題に共通性はあるのであろうか。

そこで、本稿ではラヒリの短編3作品における男女関係を分析していくことにする。本稿の流れとしては、第1章から第3章にかけて、各短編における男女関係を考察する。そして最終的には、3作品を通してラヒリの描く男女関係の根本にあるものを考えたい。

第1章 短編「病気の通訳」における男女関係

ラヒリは短編「病気の通訳」の中で、カパーシ (Kapasi) がミーナ (Mina) という既婚女性に惹かれていく様子を描いている。インドの観光タクシー運転手カパーシはインド系アメリカ人一家の旅行を案内する。ラージ (Raj) とミーナの夫婦と3人の子のダス (Das) 一家である。車内で会話が進み、カパーシが本業を病人と医者との間の「通訳」だと明かすと、突然ミーナがカパーシに興味を示す。そんなカパーシは妻との仲が冷え込んでおり、ダス夫妻にも亀裂があると感じると、徐々にミーナに惹かれていく。ついに車内で2人きりになる機会が訪れるのだが、ミーナは子の1人であるボビー (Bobby) がラージとの子ではないことを突然明かす。カパーシは不倫の負い目は感じているかと聞くと、ミーナは何も答えずに車外へ出て行った。その後、ボビーがサルに襲われる一件があり、ぎくしゃくしていた一家はそれをきっかけに絆を取り戻す。

結果として、カパーシとミーナの男女関係は発展しなかった。ここで注目すべきは、ミーナの発言とカパーシの対応だ。ボビーが夫との子ではないことを明かした際、ミーナはカパーシに、“‘Are you surprised?’” (「驚きましたか。」) (Lahiri 62) と尋ねた。それに

対してカパーシは、“The way she put it made him choose his words with care.”（彼女の言い方から彼は慎重に言葉を選んだ。）（62）と、ミーナの言動に何らかの危うさを感じて身構えている。ミーナに通訳の職業が“romantic”（ロマンチック）（50）だと言われたカパーシは、舞い上がっていた態度を一変させた。ミーナはどのような気持ちでカパーシに自身の不倫を告白したのか。また、カパーシはミーナの告白から何を感じ取り警戒し始めたのか。本章ではミーナを取り巻く環境を考察し、ミーナが不倫に手を出した理由を考えていきたい。また、ミーナの不倫告白の前と後で、ミーナに対するカパーシの思いが変化する過程を考察し、カパーシの心境を分析していく。

ミーナとラージは共にインド系アメリカ人の家庭に生まれ、高校時代から両家の親のはからいで付き合い始めた。“My entire life I saw him every weekend, either at our house or theirs. ... [O]ur parents joked about our marriage.”（今までの人生で私は週末には必ず自分の家か向こうの家で彼に会っていた。[中略] 私たちの両親は私たちを結婚させようと冗談を言っていた。）（63）とあるように、ミーナはラージ以外の男性とは恋愛の経験がなく、それは両親が子の結婚相手を決める保守的な家庭で育ったことが大きく影響していると思われる。では、なぜミーナは夫以外の男性と関係を持ってしまったのだろうか。ここで、そもそもミーナの不倫がどのようなものだったのか説明しておく。ラージの友人を家に泊めていて、ラージの不在中にことは起きた。“Bobby was conceived in the afternoon, ... She made no protest when the friend touched the small of her back”（ボビーを身ごもったのは午後のことだった、[中略] 友人が彼女の小さな背中に触れたとき、彼女は何の抵抗もしなかった）（64）というように、その翌日には友人は出発したので、ミーナはその場限りの不倫をしたことになる。なぜミーナは何の抵抗もせず、ラージにもその一件を打ち明けなかったのか疑問が浮かぶ。“He made love to her swiftly, in silence, with an expertise she had never known, without the meaningful expressions and smiles Raj always insisted on afterward.”（彼はすばやく、黙って、彼女が知りもしなかった技でことを済ませた。ラージが行為後にいつも強調する意味ありげな表情や笑顔はなかった。）（64）というミーナ視点の文脈からは、どうも嫌がっているようにも見えない。

ここでミーナとラージの保守的な家庭事情を考えると、ラージの友人との一件は一方的とはいえ、ミーナにとっては保守的なものから飛び出した解放感を得る出来事だったと考えられる。上記の引用からラージと彼の友人とでは、特に性愛に関して対照的な位置にある。ラージとしか経験のないミーナにとって、彼の友人との行為は愛がないにしても新鮮に感じたに違いない。自由に恋愛ができるはずのアメリカに在住していながら、ラージとの結婚が約束されている。その「矛盾」が要因で、ミーナはインドの保守的な考えに対して反発し、アメリカの自由にあこがれている。ミーナは不倫に衝撃を受けたカパーシに、“‘Are you surprised?’ ... ‘I’ve kept it a secret for eight whole years.’ She looked at Mr. Kapasi, tilting her chin as if to gain a fresh perspective. ‘But now I’ve told you.’”（「驚きましたか。」[中略]「私は8年間も秘密にし続けたのですよ。」彼女はまるで新しい見方を手にしようとおごを上へ動かし、カパーシを見た。「でも今あなたに話してしまったわ。」）（62）という高慢な態度を示した。ミーナは男性との一件でインドの保守的な思想を抜け出したと

自慢げにしていると考えられる。それこそ自身の不倫経験を「ロマンチック」だと思っているに違いない。

ただ、いつまでも不倫を正当化できるはずはない。ミーナの不倫の告白が一段落した後、カパーシは質問を投げかけた。“‘Is it really pain you feel, Mrs. Das, or is it guilt?’”（「本当に感じているのは痛みなのか、それとも罪悪感なのか。」）（66）というように、ミーナ自身の不倫の認識をチェックする内容である。対するミーナは、“She opened her mouth to say something, as she glared at Mr. Kapasi some certain knowledge seemed to pass before her eyes, and she stopped.”（彼女は何か言おうと口を開いてカパーシをにらみつけたが、いくらか認識していることが彼女の目の前をよぎったようで、彼女は動きを止めた。）（66）と反応した。カパーシに指摘されたことで、ミーナはラージへの罪の意識を感じ、自身の立場を認識した。ミーナは自身の非を認めず不倫を正当化していたのだ。

ここからは、カパーシの視点で考察をしていく。カパーシは、ミーナに通訳の職業が「ロマンチック」だと言われ、ミーナを恋愛対象として見るようになる。そもそもカパーシがミーナに惚れていった要因とは何なのか。カパーシの妻とは対照的なミーナの接し方である。その接し方とは、“She did not behave in a romantic way toward her husband, and yet she had used the word to describe him.”（彼女は夫に対してロマンチックに振る舞ったりはしなかったが、彼（カパーシ）のことを評するためにその言葉を使った。）（53）というものだ。カパーシは妻との仲が思うようにいかず、通訳という仕事にも理解が得られていない。そこにカパーシを夫以上に特別視してくれる、通訳の仕事をもロマンチックだと言ってくれるミーナが現われた。“When Mr. Kapasi thought once again about how she had said ‘romantic,’ the feeling of intoxication grew.”（カパーシは今一度彼女の「ロマンチック」の言い方を思うと、酔い心地が強くなった。）（53）というように、妻と対照的な接し方をするミーナに興味を持たないはずがないのだ。

カパーシは、その理想的な女性であるはずのミーナから不倫の話を持ち出されると、“Mr. Kapasi felt insulted ... Still, Mr. Kapasi believed it was his duty to assist Mrs. Das. Perhaps he ought to tell her to confess the truth to Mr. Das.”（カパーシは侮辱されたように感じた [中略] それでも、カパーシはダス夫人を助けることが自分のつとめだと思った。おそらく、彼女に対してダス氏に本当のことを告白するよう言うべきなのだ。）（66）という考えをめぐらせる。ミーナに対して怒りを感じつつも、不倫は罪だという意識付けをさせようと彼女を「思いやる」様子が見える。

一方でカパーシは、不倫に気付かないラージを気にかけてもいる。“Her confession depressed him, depressed him all the more when he thought of Mr. Das ... unsuspecting and unaware that one of his sons was not his own.”（彼女の告白で彼は憂鬱になった。ダス氏を思うとより一層憂鬱になった [中略] 息子の一人が自分の子でないとは疑ってもいないし、気付いてもいない。）（66）というように、カパーシはラージに対して哀れみを感じている。このままミーナとの交際に発展した場合、カパーシはラージに対して罪悪感を抱き続けることになる。言い換えれば、自身が痛みを背負うことになる。つまり、“‘Is it really pain you feel, Mrs. Das, or is it guilt?’”（「本当に感じているのは痛みなのか、それとも罪悪感な

のか。）」(66) というカパーシのミーナに対する発言は、自身に対して問いかけたものでもあった。ミーナと自身に罪の意識を確認させることから、妻の不倫に気付かないラージへの「配慮」がうかがえる。

ラヒリは短編「病気の通訳」で、ミーナとカパーシ両者の試行錯誤する様子を描いた。ミーナはインドの保守的思想を抜け出して、アメリカで自由に恋愛する憧れを抱いていた。ミーナはインド系アメリカ人のアイデンティティを持つ自身をアメリカへ適応させることに苦勞していたのだ。一方、カパーシは当初ミーナに惚れていくのだが、ミーナの不倫告白を境に、ダス夫妻の間に入って仲を取り持っている様子がうかがえる。アメリカ文化にうまく溶け込めずにいるミーナとそれに気付かないラージの間に入ることで、カパーシは2人の仲を取り持つという「通訳」としての役目を知らずのうちに果たしている。

第2章 短編「セクシー」における男女関係

ラヒリは短編「セクシー」において、ミランダ (Miranda) という女性が、インド人の既婚男性デヴ (Dev) と不倫をしている様子を描いている。一見順調に見えた不倫生活も、デヴの妻が帰省から戻ってくると2人は週末だけ会うことになり、徐々に2人の気持ちにずれ違いが生じてくる。ある日ミランダは、友人であるラクシュミ (Laxmi) のいとこの息子ロヒン (Rohin) を預かることになる。ミランダはロヒンにせがまれ、デヴに見せるために買ったドレスを着て、ロヒンにその姿を見せた。するとロヒンはミランダに、“‘You’re sexy.’” (「きみはセクシーだ。」) (107) と言った。その言葉を聞いたミランダは以前デヴからも、“‘You’re sexy.’” (「きみはセクシーだ。」) (91) と言われたことを思い出す。

短編「セクシー」の中で、“sexy” (セクシー) (107) という言葉はロヒンによれば、“loving someone you don’t know” (知らない人を愛すること) (107) という意味で使われている。ロヒンからそう言われた直後にミランダは、“Miranda felt Rohin’s words under her skin, the same way she’d felt Dev’s. But instead of going hot she felt numb.” (ミランダはロヒンの言葉を肌の下から感じた。デヴのときに感じたのと同じように。しかし、火照るといふより冷たくしびれるのを感じた。) (107-108) という冷静さを取り戻したような反応を示した。この一件を境にミランダは、デヴと距離を置くようになり、やがてデヴ側からも連絡は来なくなって2人の関係は終わりを迎える。ここで問題提起したいのは、ミランダはロヒンに、“‘You’re sexy.’” (「きみはセクシーだ。」) (107) と言われ、なぜデヴに対して距離を置くようになったのかということだ。以前、デヴに同じ言葉をかけられたことが大いに関係しているのは言うまでもない。本章ではデヴとロヒンの、“‘You’re sexy’” (「きみはセクシーだ。」) (91,107) という発言を、ミランダがそれぞれをどう解釈したかを分析する。そして、前章で取り上げた短編「病気の通訳」のキーワードである「ロマンチック」と比較していきたい。

まず、ミランダはデヴの言う「セクシー」という言葉をどう捉えたのかを考える。そもそもデヴの「セクシー」という発言は、マッパリウムというプラネタリウムのような場所でのデート中にあった。その施設内の橋の片側に立つと、“Even though they were thirty feet

apart, Dev said, they'd be able to hear each other whisper.”(たとえ 30 フィート(約 10 メートル) 離れていても、デヴによると、お互いにささやきあうのが聞こえる。) (91) という現象が起これ、そこでデヴは洒落っ気たっぷりに、“‘You're sexy,’” (「きみはセクシーだ。」) (91) とミランダにささやいたのだった。これは、翌週になってミランダが回想している場面であるが、“It was the first time a man had called her sexy, and when she closed her eyes she could still feel his whisper drifting through her body, under her skin.” (男性にセクシーだと言われたのは初めてで、目を閉じると未だに、彼のささやきが肌の下から体中にめぐるのを感じるようだった。) (92) というミランダの心境が浮き彫りになっている。また、その回想をしている頃のミランダの行動として、“buy herself things she thought a mistress should have” (愛人が持っていると思われるものを買う) (92) という描写がある。この2つの描写から、ミランダはデヴに「セクシー」だと言われたことで、すっかりデヴの虜になっており、気持ちが高まっているといえる。つまり、ミランダはデヴの言う「セクシー」という言葉を「愛人として認められたサイン」だと捉えたのだ。

しかし、ミランダの努力はなかなか実を結ばない。デヴの妻が帰省から戻ってくると、妻が戻った後のデヴと自身との間には、思い違いがあることをミランダは悟る。“She pictured herself in the cocktail dress, and Dev in one of his suits, kissing her hand across the table. Only the next time Dev came to visit her, on a Sunday afternoon several days since the last time they'd seen each other, he was in gym clothes.” (彼女は自身がカクテルドレスを、デヴがスーツを着て、テーブル越しに手にキスをしている姿を思い描いた。だが、次にデヴが彼女を訪れたとき、お互い最後に会ってから数日経った日曜日の午後、彼は運動着に身を包んでいた。) (93) というように、ミランダの想像とはかけ離れた姿で現れた彼に、ちょっとした違和感を覚える様子が見え始める。それでもミランダは、“So the next Sunday she didn't bother. She wore jeans.” (すると、次の日曜日彼女は悩まなかった。彼女はジーンズをはいた。) (93) というように、ドレスで出迎えた自身をばかばかしく思い、デヴの服装に合わせてきた。一連のミランダの行動からは、愛人としてデヴに対する「従順さ」が滲み出ている。

次に、ミランダはロヒンの言う「セクシー」という言葉をどう解釈したのかについて考える。ロヒンから「セクシー」だと言われたミランダは落ち着きを取り戻すと、“she imagined the quarrels Rohin had overheard in his house in Montreal.” (彼女は、ロヒンがモントリオールの自宅で耳にした口論の様子を思い浮かべた。) (108) と、ロヒン一家の冷え込んだ状況を想像した。その様子を鏡に、ミランダはデヴとの恋愛を客観的に見つめ直していると考えられる。その後のミランダの、“As Miranda imagined the scene she began to cry a little herself.” (ミランダはその場面を想像すると、1人で少し泣き始めた。) (108) という行動は、デヴとの不倫を振り返った結果である。その際ミランダには、自身に対する「負い目」と、ロヒンと彼の母親に対する「罪悪感」という感情が湧き上がると考えられる。その理由としては、“Miranda cried harder, unable to stop. But Rohin still slept. She guessed that he was used to it now, to the sound of a woman crying.” (ミランダはさらに激しく泣くと、もう止まらなかった。しかし、ロヒンは眠ったままだった。彼女は、彼がいまや女性の泣き声に

慣れているのだと推測した。) (109) という、ロヒンの心情を気にかけているミランダの様子が挙げられる。ロヒンを励ましてあげたいが、原因となっている不倫をミランダ自身もやっているという「負い目」と、直接ロヒン一家に関わってはいないが、自身も別件で加害者側の立場に立っているという「罪悪感」は、ミランダに重くのしかかった。

また、“‘He sat next to someone he didn’t know, someone sexy, and he loves her instead of my mother.’” (「父さんは知らない人の隣に座って、その人がセクシーで、父さんは母さんの代わりに彼女を愛している。」) (108) という、子どもながらに父親の浮気を完全に把握しているロヒンの発言も、ミランダの心に響いたといえる。つまり、ミランダはロヒンの「セクシー」という言葉を「性愛だけの恋愛を表す」言葉だと捉えたのだ。また同時に、「他人を傷つける」言葉だと捉えてもいる。ミランダは自身の恋愛をデヴの求めに応じているだけの性愛だと判断した。また、「セクシー」という言葉をきっかけにロヒンの家庭は崩壊したので、ミランダはこのまま交際が続けば、デヴの家庭も崩壊する危険があることに気付いたといえる。ミランダはデヴとの愛人関係を客観的に振り返り、ロヒンの家族が負った大きな傷をデヴの家族には負わせまいと、なんとかデヴとの関係を断ち切った。

ミランダはデヴとの関係において人種の違いや年齢差を気にしなかった。人種の異なる、大人の雰囲気を持っているという、デヴが自身にはない要素を持っていることも、興味を持った1つの要因である。しかし最も重視したのは、自身を一番理解してくれる人かどうかという要素である。そんなミランダを舞い上がらせた言葉が「セクシー」である。ここで、前章で取り上げた短編「病気の通訳」を振り返ると、似たような状況がカパーシとミーナに当てはまる。カパーシのミーナに対する気持ちを高めた言葉は「ロマンチック」である。カパーシがミーナに興味を抱いた決定的な理由としては、自身を一番理解してくれるかどうかというものである。これは結局「思い込み」でしかなかった。一方ミランダにとっても、デヴが彼女を一番理解してくれているという考えは、やはり「思い込み」でしかなかった。つまり2つの言葉は、本人が意味を都合よく解釈でき、一時的にしか効果を発揮しない言葉なのだ。

ここまで2つの短編に登場する男女関係を見てきたが、カパーシとミーナ、デヴとミランダの両方のカップルに共通するものとして、「一時的」な関係に終わるという要素がある。関係は長続きせず、心残りもあるなか別々の道を行くという終わり方をしている。「一時的」という点では、ラヒリの短編「停電の夜に」に登場する夫婦にも通ずるものがある。

第3章 短編「停電の夜に」における男女関係

ラヒリは短編「停電の夜に」において、ある崩壊寸前の夫婦が、かつての親密さを取り戻そうと模索する様子を描いている。大学院生で35歳の夫シュクマール (Shukumar) と、教育図書の校正をしている33歳の妻ショーバ (Shoba) が結婚して3年が経つ。夫婦の関係は半年前のショーバの死産をきっかけに冷え込んでいた。ある日電力会社から、5日間の日程で午後8時から1時間だけ停電すると通知が届く。食事を共にすることもほとんどなくなっていた2人だったが、ロウソクの明かりのもとで一緒に食事をするようになった。

ショーバは停電初日の食事の席で、お互いに小さな打ち明け話をしようと提案し、4日目まで決まりごとのように続いた。夫婦の仲は修復したように見えたが、電力の復旧した5日目の夜に2人はお互いをもう愛していないことを思い知る。

結局2人が夫婦仲を回復させたのは、短編のタイトルの通り、“A Temporary Matter”（一時的なこと）(1)であった。ここで注目したいことは、夫婦の子どもが死産に終わったことが、夫婦に何をもたらしたかということである。単純に夫婦生活の崩壊をもたらしたと位置づけるのではなく、インド系アメリカ人の夫婦がアメリカの地で家庭を築こうとしていた角度から論じていきたい。

シュクマールとショーバは両者とも、死産という事実を受け入れられないでいる。シュクマールは、子ども部屋へと模様替えしておきながら、死産後に子どもを想起させるものをすべて取り払った部屋を、勉強部屋にしていた。“when he stopped working at his carrel in the library, he set up his desk there deliberately, partly because the room soothed him, and partly because it was a place Shoba avoided.”（彼は図書館の閲覧席での勉強をやめると、意図的にそこ(子ども部屋)に机を構えた。その部屋が落ち着くということもあったし、ショーバが避けている場所ということもあったからだ。）(8)という、死産した子どもを思い起こさせるような部屋で過ごすシュクマールの行動は、疑問に思われるかもしれない。しかし、わが子の出産を控え希望に溢れていた頃を思い出すことができる部屋でもある。心を閉ざして1人でいたいシュクマールの気持ちを読み取ることができる。ショーバについては、“He knew that when they returned from the hospital the first thing she did when she walked into the house was pick out objects of theirs and toss them into a pile in the hallway.”（退院した彼女が家に入って最初にしたことは、2人のものを見つけ出すと、廊下へ積み重なるように放り投げたということ、彼は知っていた。）(16)というシュクマールの回想から、退院直後のショーバの不安定な精神状態を読み取ることができる。2人とも自身の気持ちを落ち着かせるのに精一杯で、相手を気遣う余裕がなかった。死産した子どもは夫婦にとっては、2人の間を取り持つ仲介者のような存在になるはずだった。死産によって夫婦は、2人をつなぐ大切なものを失い、孤独に陥ったといえる。

次に、インド系アメリカ人の夫婦がアメリカの地で家庭を築くことに失敗したという視点で考察を加えたい。シュクマールとショーバは共に移民2世だと推測でき、人生の大半はアメリカで過ごしている。しかし、インド出身の親を持つ2人はインドとのつながりも深い。ということは、2人はアメリカ人ではあるが、どちらの国が母国であるか判断しづらい部分がある。どちらか一方の国に溶け込もうとしても、もう片方の国のアイデンティティが邪魔してしまう。幼い頃にインドへ行って病気にかかり、あまりインドに対して良いイメージがなかったシュクマールでも、“It wasn’t until after his father died, in his last year of college, that the country began to interest him, and he studied its history from course books as if it were any other subject. He wished now that he had his own childhood story of India.”（大学最後の年に父親が死んだ後になって初めて、彼はその国（インド）に興味を持つようになり、1つの教科書であるかのように教科書からその歴史を勉強した。彼は子供時代のインドでの体験談があればなあと思った。）(12)というように、現在ではインドへの思い入れは強い。

ショーバはというと、“‘I remember during power failures at my grandmother’s house, we all had to say something,’ Shoba continued. He could barely see her face, but from her tone he knew her eyes were narrowed, as if trying to focus on a distant object.”（「そういえば祖母の家では、停電の間にみんな何か言わなければいけなかった。」とショーバは続けた。彼にはかろうじて彼女の顔が見えたが、口調からすると、まるで遠くのものを見るように彼女の目が細くなったのだとわかった。）（12）というように、インドでの生活を懐かしんでいる様子がわかる。つまり、シュクマールとショーバは生まれ育ったアメリカ、両親の故郷インド、どちらのアイデンティティも持っているのだ。

そのようなインド系アメリカ人の夫婦にとって、アメリカで子どもを出産して家庭を築くことは、アメリカでの「成功」を意味していたと考えられる。それは同時に、インドのアイデンティティと決別するという本当の意味でのアメリカ人になることでもある。しかし、死産という事実を突きつけられた夫婦は、やはりアメリカに溶け込むことは無理なのだろうかと思心暗鬼に陥った。それぞれが孤独感を強め、アメリカからそしてお互いから疎外されている感覚を覚えたのだ。“Shukumar enjoyed cooking now. It was the one thing that made him feel productive.”（シュクマールはいまや料理を楽しんでいた。彼が生産性を感じるものはそれが唯一だった。）（7-8）というシュクマールの気持ちは、出産という区切りを迎えられず、現在は他のことで達成感を味わわないと、存在意義を確認できない精神状態を表している。かといって親の母国インドに目を向けても、2人はアメリカ人であるという事実があり、いわばどの国においても異邦人という状態である。つまり、インド系アメリカ人の2人が、死産によって自身の存在意義を見失い孤独に陥った背景には、アイデンティティの問題が絡んでいることがわかる。死産は、表に出さないでおいたアイデンティティの2面性を浮き彫りにした。

そこで、ここからはショックから立ち直れずにいる夫婦を、一時的につなげた「停電」について考えていきたい。“Something happened when the house was dark. They were able to talk to each other again.”（家が暗くなると、何かが起こった。2人は再びお互いに話ができるようになったのだ。）（19）とあるように、停電の間は夫婦関係が修復されている。では、どうして夫婦は停電をきっかけに会話をする気になったのか、その背景を考えたい。暗闇の中では、ここがどこであるか、どういう状況におかれているかなどを判断する人間の力は鈍る。つまり停電には、孤独という殻を暗闇で覆い、人と人との境界を曖昧にさせ、知らず知らずのうちに相手に心をひらかせる働きがあった。また、暗闇だけがあたりに広がることで、国という概念が消え、夫婦のインド系アメリカ人のアイデンティティを払拭したともいえる。停電は2人の判断力を麻痺させ、関係崩壊の原因だった「孤独感」と「アイデンティティ」の意識を取り払ったのだ。

しかし、5日目に電気が復旧すると、“I’ve been looking for an apartment and I’ve found one.”（アパートを探していたら、ちょうど見つけたの。）（21）というショーバの告白が始まった。すぐにでも家をでていく構えだ。一方シュクマールも、“Our baby was a boy,”（ぼくらの赤ん坊は男の子だったよ。）（22）と、死産した子どもの性別を知らずに済んだことを不幸中の幸いとしていたショーバにとって、タブーの告白をしている。“It wasn’t the

same, he thought, knowing that the lights wouldn't go out.”（電気が消えないとわかると、同じようにはいられないと彼は思った。）（20）という、シュクマールの思いから夫婦生活の限界が見えてくる。電気が復旧し再び元の生活が始まると、停電中とは勝手に違うことを悟ったのだ。電力が供給されている状態を現実だとすると、停電は「一時的」な幻のようなものだ。一時的に関係が持ち直しても、お互いが死産を引きずって心を閉ざしているという根本的な問題が解決されていない。

短編「停電の夜に」においてラヒリは、夫婦の仲をつなぐものとして、子どもと停電を提示した。不慣れな土地での男女関係において、相手を理解し付き合っていくには「仲介者」が必要なのである。子どもは命ある限り夫婦をつなぐ「永久の」存在である。一方、停電は2人の懸案を解消したが、それは「一時的な」出来事にすぎない。仲介者となるはずの子どもは死産してしまい、停電で関係をつなごうとした夫婦であったが、あまりにもろかったのだ。現にラヒリは、短編「病気の通訳」では、カパーシに仲介者を演じさせ、関係の冷え込んだ夫婦を、関係修復の方向へ向かわせた。カパーシと別れた後の夫婦は、子どもを仲介者にして関係を続けていくに違いない。また短編「セクシー」で、ミランダとデヴの不倫関係をつなげていたものは、「セクシー」という言葉だ。やはりこの言葉にも、2人の不倫関係を維持させる力はなかった。ラヒリの3短編を通して男女関係は、仲介するものが頑丈か、もろいかによって長続きするかどうかが決まると考えられる。つまり停電は、男女関係をつなぐ「絆のもろさ」を意味する。

結論

ラヒリは3つの短編において、様々な背景を持つ男女の、様々な恋愛の形を描いた。3つの短編に登場する男女には、いずれも問題を抱えながら関係を続けているという共通点がある。その問題が浮き彫りになった際に、男女の絆の強さ、あるいはもろさが見えてきたのだった。その問題とは、存在意義、つまりアイデンティティを感じられずに現実逃避をするというものだ。

ここで、短編「病気の通訳」でのミーナとカパーシの会話に注目したい。

“My job is to give tours, Mrs. Das.”

“Not that. Your other job. As an interpreter.”

“But we do not face a language barrier. What need is there for an interpreter?”

“That's not what I mean.”

... “I was hoping you could help me feel better, say the right thing. Suggest some kind of remedy.” (65)

「私の仕事はツアーを案内することです。」

「そうじゃなくて、別の仕事。通訳としてよ。」

「でも、言葉の壁はありませんよ。通訳にどんな必要性があるのですか。」

「そういう意味じゃなくて。」

[中略] 「あなたが適当なことを言って、私を回復させてくれると思っていたのよ。
なにか治療法を示して。」

上記の会話からは、ミーナが通訳としてのカパーシに求めている役割が判断できる。このときミーナは、夫の友人との不倫を誇らしげに思うという「病」にかかっていた。不倫は客観的に見れば罪であるが、アメリカの生活様式にうまく溶け込めていなかった彼女にとっては、存在意義を強く感じる出来事であった。つまり、通訳のカパーシには彼女の「病」であるアイデンティティの不安定さを認めてもらいたかったのだ。言語の壁を取り除く通訳の役割ではない。

ミーナの理想とする仲介役とは、彼女の「病」であったアイデンティティの不安定さを認めてくれる役割であった。男女の仲を取り持つ以前に、自身がアイデンティティで苦しんでいることを認めてもらいたいという思いが感じられる。他の登場人物たちもアイデンティティの面で不安定だったことで、カパーシが「ロマンチック」、ミランダが「セクシー」という甘い言葉に翻弄されたのだ。また、短編「停電の夜に」の夫婦も「停電」という一時的な絆に依存しすぎてしまった。このように、ラヒリの3つの短編における男女関係の根本には、アイデンティティの拠り所がないことが秘められていたと考えられる。

引用文献

Lahiri, Jhumpa. *Interpreter of Maladies*. New York: Houghton Mifflin, 1999.

アメリカン・ヒーローの変遷 ～ヒーローの条件～

廣井 茜

序論

ヒーローは、どこの国に、いつの時代においても存在する。それは、人々がヒーローの存在を常に欲しているからなのであろう。実在する人物だけでなく、人々が望むような、作られたヒーローも存在する。ヒーローは人々から尊敬され、慕われる。そして、ヒーローが死んでしまったとしても、彼らの活躍は伝承されていく。国が独立してから 230 年、世界の国と比べると歴史は浅いアメリカであるが、アメリカには数多くのヒーローが存在する。

しかし、ヒーローの名前を知っていても実際にどのような事をしたのか、なぜヒーローと呼ばれるのかは知らないことが多い。また、本当にヒーローと呼べるような偉大な事をしたのか、疑問を持たせるヒーローも存在する。この論文では数多く存在するアメリカン・ヒーローの中から、デイヴィッド・クロケット (David Crockett)、ジェシー・ジェームズ (Jesse James)、そしてビリー・ザ・キッド (Billy the Kid) の 3 人を挙げて考えていく。この 3 人はアメリカ西部開拓時代に活動していた人物である。アメリカの発展において、この西部開拓時代は大きな役割をもっていた。そうした時代だからこそ、人々はそれぞれの使命を持ち活躍していった。では、なぜ彼らはヒーローと呼ばれるようになったのだろうか。ヒーローになるための条件について考えていく。

また、いつの時代においてもヒーロー映画は変わらずに観衆に人気があり、彼らを扱った映画も数多く作られている。だが、そのヒーローは常に変わらず同じように描かれるのだろうか？ 3 人は実在した人物であり、彼らが行ってきたことは歴史の一つとして語られている。だが、その一つ一つの行動や、人柄も描き方により大きく違って見えるだろう。映画の製作者の個性により着眼点が違い描かれ方も変わってくるが、製作者だけではなくその映画が作られた時代や、社会的背景も映画に大きく影響を与えるだろう。本論文では、その影響がヒーローにどのような変化をもたらすのか、実際に映画を比較し考えていく。また、その映画にどういった時代、社会背景があったのかを調べていく。

第 1 章では、西部開拓時代の英雄、デイヴィッド・クロケットについて扱う。彼は多くの伝説を持っている。熊退治の話は有名であり、彼の活躍についての歌も存在している。彼がどのような経緯でヒーローとなったのか、そして時代はクロケットをどうスクリーンに描いたのか述べていく。

第 2 章では、西部の義賊、ジェシー・ジェームズについて考えていく。彼は、強盗や殺人を犯したにもかかわらず、今なお人気のあるヒーローである。彼の人生を見ていき、ヒーローに変わっていった経緯をみていく。そして、クロケット同様に彼のスクリーンでの活躍の変化を挙げていく。

第 3 章では、若きガンマンであり、そしてアウトローのビリー・ザ・キッドについて述

べていく。彼もまたジェシーと同様に罪を犯しているが、人気がありヒーローと見なされている。犯罪者からヒーローへと変わっていく経緯を挙げ、スクリーンでの変化を考えていく。

第 1 章 David Crockett

(a) なぜ英雄と呼ばれるのか

西部開拓の英雄として今でも幅広く人気のあるデイヴィッド・クロケット。彼が活躍した時代からずいぶんと時がたつが、今までに彼に関する多くの映画が作られた。なぜ、彼はそれほどまでアメリカにおいて人気があるのだろうか。

デイヴィッド・クロケット (1786~1836) は 1786 年 8 月 17 日テネシー州ライムストーン (Limestone, Tennessee) に生まれた。幼いころ彼は父親の借金のために、様々な所へ働きに出た。教育を受ける機会があまりなかったが、彼は自然の中で育ち馬に乗ること、そして銃の扱いを覚えた。彼が 3 歳で熊を撃ったという伝説は有名である。

1812 年、アメリカ合衆国はイギリスとの戦争に入った。イギリス軍はネイティブ・アメリカン (注 1 この論文ではネイティブ・アメリカンという表現をするが、参考文献の引用の際はそのままだインディアンと表現する。) の一部と共同して、開拓地のアメリカ人を襲撃した。この知らせを受けたクロケットはアメリカ軍の義勇兵に応募し、翌年アンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson) 将軍の下でクリーク戦争 (Creek War) に参加した。

1817 年には治安判事 (justice of the peace) にも選ばれた。クロケット判事の公平な裁判は評判がよく、彼は次第に人望を集めるようになった。また、彼の裁判の書類の最後には、「“Be always sure you’re right, go ahead” (自分が正しいと確かめよ、それから先は前進) という彼のモットーを書くのであった。」 (海野 68) (英文は Person sheet 引用)

鹿革服の熊狩人デイヴィッド・クロケットの名はテネシーだけでなく、東部でも知られるようになった。彼は農民兼猟師としての優れた力と腕に加えて、大衆受けする機知があり、トール・テールの表現にたくみで周りの人々の心を強く引き付けた。

テネシーの愉快なヒーロー、デイヴィッド・クロケットの話は新聞をにぎわせた。彼の人気に目を付けた男が、クロケットにテネシー西部地区から連邦議会に出馬するように勧めてきた。その後、クロケットは政治家としての野心を持つようになる。1821 年、クロケットは辺境の農民の支持を集めて、テネシー州議会の議員に当選した。

クロケットは州議会議員を二期務めた後、1825 年には連邦議会に打って出た。クロケットは共に戦ったジャクソン (1829 年第 7 代アメリカ大統領に当選した。) の「熱烈な支持者」 (亀井 105) だったが、ジャクソンとその党である共和党を激しく批判した。ジャクソンのネイティブ・アメリカンへの対応がその原因である。ジャクソンはネイティブ・アメリカンにとって公平で自由な政策を約束したが、その結果は 1830 年の強制移住法 (Indian Removal Act) であった。「強制移住法とは、ミシシッピ川以东のインディアン諸部族をミシシッピ川以西の一定地域に強制移住」 (池田・松本 48) させた法律である。クロケットの祖父はネイティブ・アメリカンに殺され、彼自身もクリーク戦争でネイティブ・アメリ

カンを殺した。しかし、クロケットにとってネイティブ・アメリカンは友人であった。なぜなら、かつて彼が家族とともに住んでいたテネシーの西オビオン川 (Obion) にて、クロケットは彼らと様々なものを交換して生活してきたからだ。そのため、クロケットは激しく強制移住法に反対した。

1833年、彼は下院議員に当選することができたが、ジャクソン及び民主党から対立したことは致命的であり、その後1835年の選挙では落選してしまった。また、ワシントン D.C. (Washington, D.C.) で活動していたため、地元テネシーから遠ざかる結果になり地元での人気は落ちてしまった。彼は地元テネシーから離れ新しい土地を目指した。サム・ヒューストン (Sam Houston) に呼ばれ、テキサス (Texas) に向かった。ヒューストンとはクリーク戦争の時から仲間であった。

当時テキサスはメキシコ領だった。しかしそこには多くのアメリカ人が移り住んでいた。そのため、メキシコ政府とアメリカ人の移民との間でトラブルが多くなった。テキサスではメキシコからの独立運動が計画され、ヒューストン将軍がその指揮を執っていた。そして、テキサス共和国の独立のための義勇軍が合衆国全体に呼びかけられていた。

クロケットはサン・アントニオ (San Antonio) が戦闘の中心になっていることを聞く。町のはずれにあるアラモの砦にウィリアム・トラヴィス (William Travis) 大佐が立てこもり、メキシコ大統領アントニオ・ロペス・デ・サンタ・アナ (Antonio López de Santa Anna) の5千人の軍に包囲されていた。クロケットはアラモの砦へと向かった。砦にはトラヴィス大佐のほかに181人の男と、女と子供が若干いた。しかし、ここで落ち合うはずのヒューストンがまだ到着していなかった。

1836年3月6日、メキシコ軍は総攻撃をアラモに仕掛けた。クロケットはライフルを持ち奮闘したが、アラモの砦のアメリカ人たちは全滅した。これが有名なアラモの戦い (Battle of the Alamo) である。「クロケットは戦いながら死んだのではなく、捕虜になって処刑されたのだという。」 (亀井 108~109)

この戦いで時間を稼ぎ、「Remember the Alamo」 (アラモを忘れるな) の合言葉のもと、アメリカ人側の結集がなされ、6週間後ヒューストンによるサンタ・アナ軍の撃破と独立へとつながった。

クロケットの死後、人々は彼の人生を記事や本にしていった。しかし、クロケットの話をもとに拡大していくうちに、読者の心に潜んでいた思いを強く反映するようになった。「インディアンや黒人、メキシコ人やキューバ人に対する軽蔑感、とくにインディアンに対する恐怖と憎悪の気持ち」 (亀井 126) である。伝説、神話の中でクロケットはそうした人種差別の思いの中脚色されていた。クロケットの話の中で、ネイティブ・アメリカンは徹底的に野蛮人に描かれた。また、彼らに対するクロケットの対応も同様に残酷にふるまうことになる。しかし、実際彼はネイティブ・アメリカンへの態度は対等であり、彼らを苦しめた法律、強制移住法にも強く反対していた。だが人々はクロケットを自分たちにとって完璧な英雄にするために、死後彼の伝説を新たに作り上げていったのである。

それだけではなく、クロケットはアメリカの拡張主義の先鋒にされた。そもそもテキサスの独立自体がアメリカの拡張運動のあらわれだった。ジャーナリストのジョン・オサリ

バン (John O'Sullivan) は、『ユナイテッド・ステイツ・マガジン・アンド・デモクラティック・レビュー』 (United States Magazine and Democratic Review) 誌の「1845年7・8月に「併合」と題する論文を掲載し、「manifest destiny」(明白な運命)という言葉を使用した。」(鈴木・荒木 49) オサリバンのように、年々増加するアメリカ人の自由な発展のために、神が与えた大陸でアメリカ人が拡大することは「明白な運命」だった。「このような考え方は19世紀半ばの領土拡大運動の格好な理由付けとなり、やがてはアメリカの対外膨張政策を正当化する心理的基盤」(鈴木・荒木 49) となった。そうした考えもあり、領土拡大の戦いであったアラモの戦いにおいて、玉砕したクロケットは拡張主義の英雄として扱われるようになったのだ。

こうして今もなお、デイヴィッド・クロケットはアメリカを代表とする英雄の一人となったのだ。

(b) 映画の中のクロケット

デイヴィッド・クロケットを扱った映画は数多く存在する。その中で、1960年に公開された『アラモ』 (The Alamo) と2004年に公開された『アラモ』 (The Alamo) の2本の映画を比較する。時代の変化により、彼に対する考えや扱いがどう変わっていったのかを考察していく。(注2 なおこの論文では1960年版を旧『アラモ』、2004年版を新『アラモ』と表記する。)

旧『アラモ』では、クーンハットと鹿革服に身を包んだクロケットは仲間を導き、敵であるメキシコ軍から食料である牛を盗んだり、美しい未亡人とロマンスがあり、その未亡人を狙うメキシコ軍側のスパイであった男を懲らしめたりした。人々が英雄として思い描く豪快なクロケットを、ジョン・ウェイン (John Wayne) が演じた。メキシコ軍の総攻撃を受けた戦いでは、英雄は最期まで力強く生き、そして勇ましく死んでいった。この映画でクロケットは、一人弾薬庫の中に松明を持ち自爆していった。

一方、新『アラモ』ではビリー・ボブ・ソントン (Billy Bob Thornton) がデイヴィッド・クロケットを演じた。こちらのクロケットは、確かに豪快ともいえるような人柄ではあったが、どこか控え目なクロケットとなっている。他の人々よりも射撃の腕が優れ、人望が厚い人物となっていたが旧『アラモ』のように、伝説的な人物のように描かれていなかった。

劇中クロケットがアラモの砦に到着し、酒の席で人々にスピーチをするシーンがある。クロケットの話に人々は興奮した。すると、一人の男がクロケットに、“I’m half alligator, half snappin’ turtle. I can slide off a rainbow and jump the Mississippi in a single leap.” (私はワニとカミツキガメの血を持ち…ミシシッピ川を虹で渡る。) という、有名な彼の二つ名を言い、“Tell’em, Davy, how you can whup your weight in wildcats.” (ヤマネコも尻尾を巻いたんだろ?) と、クロケットに彼の伝説の話について同意を求めて来た。その話に対し、クロケットは冷静にこう言った。“Well, that wasn’t me...That was just an actor in a play. He was performin’ a character.” (あれは、違う。あれは芝居の役者だ。) その言葉に男は一瞬で顔が曇った。男は不安を隠すように、“Davy Crockett, the Lion of the West. I dare San tanna to show

his face now you're here.”（あんたはデイヴィッド・クロケット、西部の獅子だろ。サンタ・アナも怖気づく。）と言ったが、クロケットは、“Well, I understood the fightin' was over.”（戦争は終わったものだと思ったが。）と答えた。そのセリフに男だけではなく、他の人々の顔から笑顔が消えた。アラモに集まる人々は英雄の登場で戦いに希望を見出していたが、その希望が消えていったように思われるシーンである。

二つの映画の中で大きく違う点は映画のラストである。旧『アラモ』はアラモの砦で玉砕したところで映画は終わっている。この「悲劇的な出来事」、そして「自由を勝ち取るための戦い」であったことを忘れてはならない、そのように歌に乗せてフェードアウトする。フィクションの部分が強いため、このアラモの戦いがいくらか美化されて見える。自由のために死んでいった英雄たちの奮闘ぶりを強調して描いている。

ところが新『アラモ』では、サム・ヒューストン将軍らがメキシコ軍を倒すところまで続く。かの有名な、“Remember the Alamo”の掛け声とともに、西のナポレオンと呼ばれたサンタ・アナを、今度はヒューストン自身がナポレオンになりメキシコ軍を追い詰めていく。劇中、メキシコ軍は残虐に描かれた。特にそのトップであるサンタ・アナは敵にはもちろん仲間のメキシコ軍に対しても情けを見せなかった。そうした完全な悪であるサンタ・アナ、メキシコ軍に復讐する姿はまさにヒーローであり、ヒューストンたちが残酷にメキシコ軍を倒しても違和感がなく、むしろ観客としてはヒューストン軍を応援したくなる気持ちに駆られる。

このように新旧の『アラモ』において大きな相違点があるが、こうした違いには映画が撮られた時代・社会背景が大きく影響しているだろう。旧『アラモ』が公開されたのは1960年。それまでにアメリカは第一次、第二次世界大戦、朝鮮戦争といった大きな戦争をしてきた。それらの戦いを通して、アメリカは勝利を手にし、そして国を発展させてきた。負けたことがないアメリカにおいて、映画では戦争の悲惨さを物語る以上に、戦争での勇ましい戦いぶり、英雄たちの武勇伝を伝えていくことに重点が置かれたのではないだろうか。敵側のメキシコ軍もただ残虐な人々として描かれず、彼らにも彼らの帰りを待つ人々がいて、そして彼らの死を嘆く者がいた。初めは、メキシコ軍側にそうしたシーンが描かれていたが、映画のラストではそれが逆転し、生き残った女性と子供が、メキシコ軍側の人々に見送られながら去っていく場面がある。メキシコ軍とその家族たちは、家族を失う悲しみを知っているからこそ、そうして同情の気持ちを持って見送ることができたのだろう。敵味方に関係なく、死に対する気持ちはみな同じであると考えられ、またそうしたシーンはこの映画を美しく見せていると考えられる。

2004年に公開された『アラモ』には、その時代・社会背景として、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロが大きく関係しているだろう。イスラム教徒のテロリスト19名が、アメリカの民間航空機をハイジャックし、ニューヨークの貿易センタービル（World Trade Center）と国防総省（Pentagon）に激突させ、多くの死傷者をだした事件だ。当時のブッシュ大統領（George W. Bush）は攻撃の犯人を、オサマ・ビン・ラディン（Osama Bin Laden）（名前はBBC NEWSから引用）指導の過激派組織アルカイダ（Al-Qaeda）と断定した。ブッシュ政権は彼らに訓練基地を提供しているアフガニスタン（Afghanistan）のタリバン政

権 (Taliban) にビン・ラディンらアルカイダメンバーの引き渡しを要求した。しかし、タリバン政権はこれを拒否した。その結果、アフガニスタン戦争 (War in Afghanistan) が勃発した。報復の戦争は、多くのアメリカ国民が支持した。「ブッシュ政権の「対テロ戦争」は悪との十字軍的な戦い」 (秋元・菅 330) として位置づけられた。

やられたらやり返すという復讐の精神が、人々の心に宿っていただろう。そうした、社会的背景を受けたことにより新『アラモ』は、アラモの戦いを悲劇的な出来事で終わらせることなく、クロケットに次ぐヒーロー、ヒューストンを誕生させ見事に復讐を成功させた。

第 2 章 Jesse Woodson James

(a) なぜ英雄と呼ばれるのか

ジェシー・ジェームズ (1847~1882) は強盗や殺人を繰り返して西部を荒らしまわった。しかし彼はアメリカにおいてヒーロー視されており、人気がある。彼を美化した映画も数多く存在する。だが、なぜ殺人や強盗をした、本来なら犯罪者として見られる人物が英雄と呼ばれるのだろうか？

ジェシー・ジェームズは 1847 年 9 月 5 日、ミズーリ州クレイ郡 (Clay country, Missouri) に生まれた。1861 年南北戦争が勃発し、南北の境にあったミズーリ州は混乱した状態になった。北部派と南部派が激しく対立し、武力衝突も起こった。戦争が起これると兄のフランクは南部派の義勇軍に志願し戦場に行き、北軍に対抗するゲリラ隊員となった。まだ 14 歳に満たないジェシーは両親のもとに留まっていたが、後にジェシーは兄を追ってゲリラ隊員になり、実戦に参加した。

南軍の敗北によって戦いが終わった後、ゲリラ戦士の待遇は厳しかった。彼らに恨みを持つ者は多かった。1865 年、ジェシーとその仲間は降伏しようとしたが、北軍の兵士が白旗を無視して発砲しジェシーは胸に被弾した。その後帰郷したが、その時彼の看病をしたのが従妹のゼレルダ・ミムズ (Zerelda Mimms) であり、1874 年二人は結婚することになる。

1866 年、クレイ郡の郡庁所在地リバティ (Liberty) の銀行に数人の盗賊が押し入り、金銀、紙幣、債券など総額 6 万ドル近くを奪った。この事件は、「アメリカで平和時に行われた、白昼の銀行強盗の最初」 (亀井 241) といわれている。この事件の犯人の中に、ジェームズ兄弟が含まれていた。

なぜ彼らは犯罪に走ったのか？それには先ほど述べた南北戦争での敗北が関係している。戦争が終わり故郷は戦場ではなくなったが、勝った側の北軍の横暴が蔓延していた。人々はどうしようもない怒りの感情を抱いた。そこでジェシーとフランク、そしてかつてのゲリラ部隊での戦友ヤンガー兄弟 (Younger brothers) は、戦いの矛先を北部の息のかかった企業の襲撃に転じたのだった。

1837 年、アイオワ州アデア (Adea, Iowa) で数人の盗賊が線路を外して列車を止め、金庫と乗客から約 6 千ドルを奪うという事件が起きた。犯人は不明だが、これもジェシー達

の仕業とされた。同様の事件が繰り返され、ジェシーは列車強盗の先駆けとされた。彼らは1866年から約15年間、ミズーリ州を中心に荒らしまわった。

ジェームズ一味に手を焼いた鉄道会社は、ピンカートン事務所（Pinkerton National Detective Agency）に依頼をした。1873年以後、ピンカートン（Allan Pinkerton）は彼の部下をミズーリ州に送り込んだが、ジェームズ一味の逮捕には至らなかった。また、ピンカートンの一隊はジェシーの両親の家を襲撃し、ジェシーらを捕まえる予定が結果として母のゼレダの片腕が失われ、幼い異父弟が亡くなった。このことからピンカートンのやり方は支持を失い、ジェームズ兄弟は復讐心に燃えた。

ジェームズ一味には、鉄道会社などから「生死を問わず」（Dead or Alive）の懸賞金がかけていた。ミズーリ州知事からは兄弟の一人につき1万ドルという大金がかけられた。1882年4月、ミズーリ州セント・ジョーゼフ（Saint Joseph）にトマス・ハワード（Thomas Howard）という名に変えて、妻子と共に暮らしていたジェシーだったが、2丁拳銃をはずして壁の絵をかけ直していた時、「この賞金に目がくらんだロバート・フォード（Robert Ford）という若い部下に背後から撃たれて死んだ。」（亀井 243）とある。

本来なら、悪党であるジェシーを殺したことにより英雄とされるはずのフォードだったが、ジェシー殺害の10年後、コロラド州クリード（Creede, Colorado）において、ジェシーの信奉者エドワード・オケリー（Edward O'Kelley）に撃ち殺された。フォードの「墓に「裏切り者、臆病者」（betrayed, coward）と書かれた。」（西江 55）

ジェシー・ジェームズの遺体は、高価な棺に納められた。さらに、「氷漬けにされた遺体が民衆の前にしばらく公開された」（西江 54）という。裏切り者による悲劇的な死が、彼を永遠の英雄へと変化させた大きな要因であると考えられる。

しかし、犯罪者の彼がなぜ義賊とされ、英雄と見られたのだろうか。盗みを働いたにもかかわらず、彼は民衆から人気があった。それは、彼らが強盗を働いた鉄道と銀行に問題があったからだ。西部において、鉄道と銀行は北部から資本を受けていたため、農民の反感をかっていた。特に「鉄道は、当時の農民運動の抗議の対象」（岡田 46）であったとされる。また、ある新聞は、「盗んだお金は立派な政治家や鉄道業者の財産と同様、まっとうに稼がれたもの」（岡田 46）であると掲載した。このようにみると、民衆から積極的な共感を受けていたことがわかる。南北戦争から、北部に対する不満を南部の人々は抱いていたが、その不満がジェシー・ジェームズという悪党を英雄視する要因の一つとなった。

南北戦争とジェシー・ジェームズの英雄視の関係は深い。ジェシーは南部側から戦争に参加し、そして敗戦した。ジェシーの存在は、「敗れた南部」の象徴として最適であった。勝者が必ず正義ではなく、敗者もまた弱者であるとは言えないことを証明している。

南北戦争後、負けた南部の人々は英雄を渴望した。そしてその人々の目にとまったのがほかならぬ、ジェシー・ジェームズだったのであろう。そうした時代がアウトローを英雄へと変えてしまった。

(b) 映画の中のジェシー・ジェームズ

西部で人気のアウトロー、ジェシー・ジェームズを題材にした映画も数多く存在する。

それは 21 世紀に入っても変わらずジェシーの映画は作られた。しかし、ジェシーの描かれ方に変化が見られる。2001 年公開『アメリカンアウトロー』 (*American Outlaws*) と日本では 2008 年に公開された『ジェシー・ジェームズの暗殺』 (*The Assassination of Jesse James by the Coward Robert Ford*) を比較しどのような変化があり、またその変化した理由を時代、社会背景を参考に考えていく。

まず、『アメリカンアウトロー』は南北戦争からジェシーや兄のフランク、そしてヤンガー兄弟たちが帰還するところから始まる。北軍の残党と戦うシーンがあり、そこでジェシー達の活躍を披露している。故郷に帰還し、家族や従妹との再会を喜ぶ。しかしその喜びもつかの間、州政府の後ろ盾を得た鉄道会社の者が、強引に土地を買占めようとしていた。その土地の中にジェシー達の住む家も含まれていた。買占めを断固として拒否した結果、ジェシーの家は爆破され、母親は死んでしまった。そこから、ジェシー達の復讐が始まった。母親の仇打ちから、彼らはアウトローへの道に行くことになる。そうしたバックグラウンドがあるため、映画を観る誰もがジェシー達を応援したくなる気持ちに駆られる。彼らが復讐のために犯罪行為に走ることに、誰も疑問は持たないだろう。

一方、2007 年に製作された『ジェシー・ジェームズの暗殺』では、ジェシーの描かれ方が大きく変わっている。ブラッド・ピット (Brad Pitt) 演じるジェシー・ジェームズは、列車強盗をしたものの、『アメリカンアウトロー』のジェシーとは違い、淡々としている。派手に馬を乗り回すこともせず、そして派手に銃を乱射することもなかった。『アメリカンアウトロー』では、ジェシーの全盛期を描いているが、それとは対照的にジェシーが暗殺されるまでを描いている。この映画ではジェシーを暗殺した犯人である、ロバート・フォードに注目している。フォードは、ジェシーにかけられていた懸賞金以上に、名声を欲していた。有名なジェシーを殺すことにより、自分は名声を手に入れられると考えていたが、現実は違ったようだ。フォードがジェシー・ジェームズを劇で演じている時、観客席から、“Murderer!” (人殺し)、“Cur!” (くず)、“Coward!” (臆病者) という声が上がった。逆にジェシーに対しては、ジェシーの死後酒場でこんな歌が歌われていた。“And he stole from the rich. And he gave to the poor. He had a hand. And a heart and a brain.” (金持ちから奪い、貧しい者に与えた。腕も心も頭もある男だった。) 結局フォードはジェシー信奉者に殺されてしまうが、ジェシーが亡くなった時とは違い、彼をヒーローとして葬った者はいなかった。ヒーローが犯罪者だったとしても、そのヒーローを暗殺した者は決してヒーローにはなれない。

では、この二つの映画はなぜここまで大きく違うのだろうか？ 2001 年と 2007 年の間に何があつただろうか。第 1 章でも述べた、2000 年のアメリカ同時多発テロが関係していると考えられる。テロの攻撃にあい、アメリカ国民が報復を期待した中で起きたアフガニスタン戦争。多くのアメリカ人がアメリカのリベンジを支持していた。そうした中で作られた『アメリカンアウトロー』は必然的に、リベンジの部分が大きく描かれたのだろう。アウトローとなったものの、人々にとっては悪の存在である鉄道会社を相手に報復をしていく姿は、当時のアメリカの姿を映していたのではないかと考える。

アフガニスタン戦争後、アメリカは「悪の枢軸国」としてイラク (Iraq) とイラン (Iran)、

そして北朝鮮 (North Korea) を挙げた。アメリカがヒーローになり、大量破壊兵器の製造、保持を支援、そしてテロリストを支援するとされた「悪」の国を倒していく構図が出来上がっていた。映画ではなく、現実世界でアメリカが「ヒーロー」に変わっていた。イラク戦争 (War in Iraq) が勃発し、多くの死傷者が生じた。戦争が終わった後も、イラクではアメリカ軍などを狙ったテロなどが相次ぎ、不安定な社会が続いている。こうした事態はメディアを通じ見ていたアメリカを含む世界の人々が、この戦争を批判した。当初はヒーローであったはずのアメリカが、そのヒーロー性を失っていたのだった。ヒーローが衰退した社会であったと考えられる。こうした社会背景を受けて、2007年に製作された『ジェシー・ジェームズの暗殺』は、ヒーローが大活躍する作品ではなく、ヒーローが衰退していた作品になっていったのではないだろうか。

第3章 Billy the Kid

(a) なぜ英雄と呼ばれるのか

ジェシー・ジェームズと並んで、西部のアウトローとして有名な人物としてビリー・ザ・キッド (1859~1881) があげられる。彼もまた一見ただの犯罪者と思われるが、現在に至るまで彼をヒーローとして描く数多くの映画や本が世に出回っている。彼はなぜ犯罪者からヒーローへと変貌したのだろうか？

ビリー・ザ・キッドは 1859 年にニューヨーク (New York) に生まれた。本名はヘンリー・マッカーティ (Henry McCarty) である。しかし、長い間彼の本名はウィリアム・H・ボニー (William H. Bonney) とされていた。彼の母親は 1874 年、ビリーが 14 歳の時に亡くなった。

彼が悪の道に走ったきっかけは、「母を口ぎたなく恥ずかしめた男を殺したことが一般的とされている。」(亀井 254) しかし、これはパット・ギャレット (Pat Garrett) の本『ビリー・ザ・キッドの信頼しうる生涯』 (*The Authentic Life of Billy, The Kid*. 1882) で広められた「伝説」だった。「記録に残っているところでは、一八七五年 (つまり母の死後)、彼は不良仲間が中国人の家から洗濯物を盗むのに加担して牢屋に入れられ、煙突から脱走して、西のアリゾナに逃れた。」(亀井 254) とされている。その後 1877 年、彼はカウボーイなどをしてしていたが、酒場での喧嘩で相手を撃ち殺しニューメキシコ (New Mexico) へと逃げた。

1878 年、有力な牧場主ジョン・H・タンストール (John H. Tunstall) と出会いそのカウボーイとなるが、タンストールとの出会いよりビリーは後にリンカン郡戦争 (Lincoln County War) に巻き込まれることになる。

リンカン郡は、ニュー・メキシコ南部にある広大な地域だ。そこで二つの大きな勢力がぶつかった。一つはテキサスの大牧場主であるジョン・S・チザム (John S. Chisum) である。彼に協力していたのが先ほどのタンストールであった。チザムが精肉業を始めた時、もう一つの勢力が彼を阻もうとした。首都サンタ・フェ (Santa Fe) で軍隊などを相手に牛肉販売をしていたウィリアム・ローゼンタール (William Rosenthal) がその中心人物であっ

た。彼は、サンタ・フェ・リングという政治、経済、司法の実力者を集結した徒党と手を組み、チザムの勢力を排除しようとした。リンカン郡でこのリングの傘下にあったのが、ロレンス・G・マーフィー (Lawrence G. Murphy) とその部下ジェイムズ・J・ドーラン (James J. Dolan) の一味であった。結局、「リンカン郡の戦いは、食糧請負業者間経済的主権争い」(鶴谷 88) だった。

1876年、ジョン・H・タンストールはリンカンの南に牧場を開いた。そして、マーフィーたちの不正を批判していたカンザス出身のアレクサンダー・マクスウィーン (Alexander McSween) と協力し、サンタ・フェ・リングの銀行に対立する銀行を創立し、チザムを頭取にした。

1878年1月、タンストールは新聞にブレイディ保安官の不正を暴く投書をした。しかし、それはドーランたちの怒りを招き同年2月タンストールは、ドーラン一味の手先の者に撃ち殺されてしまった。こうして、リンカン郡戦争が勃発した。

タンストール暗殺により、タンストール側は復讐に燃えた。3月に犯人2人を捕まえた。しかしビリーは、リンカンで裁判にかける前に彼らを殺してしまった。そして4月、ブレイディ保安官とその助手も、リンカンの路上でビリーたちの手により殺された。7月になると、タンストール側はマクスウィーンの家を「籠城」した。総勢17人に対し、40人が家を包囲した。攻防戦は5日間にも及んだ。夜中になり、ビリーが先頭に立ち脱出を試みた。マクスウィーンを含む4人が殺され、一人は重傷を負ったが残りは無事に逃げ延びた。

マクスウィーンの死により、リンカン郡戦争は終わった。その後ビリーとその一味は、家畜泥棒をするなど、アウトローの生活をしていた。

ビリーは、各地で悪事を働いたが、彼はチザムの牧場から牛を盗み売り払うこともした。チザムはこれに怒り、ドーラン派と一緒にビリーを追うことになった。ドーラン派は新しい保安官にパット・ギャレットを任命した。ギャレットとビリーは知り合いだった。

(友人ではなかったという説もある。) ギャレットはビリー逮捕に全力を注いだ。ギャレット一隊はフォート・サムナー近辺でビリー一味を襲撃し、ビリーを逮捕した。ビリーはリンカンで処刑されることになったが、ビリーは牢屋から脱走した。ビリーは再びフォート・サムナーに戻った。ギャレットは二人の助手を連れて、ビリーを追いかけた。7月14日早朝、ギャレットはビリーが宿泊していた宿の部屋へ侵入し、暗闇の中ビリーに発砲した。そしてビリーは21歳という短い生涯をとじた。ジェシー・ジェームズ暗殺の9か月前だった。ビリーは「二十一歳の短い生涯に、二十一人の人間を殺した」(西江 49) とされる。

西部の掟では、暗闇の中で警告も与えずに撃つことは許されていなかったが、ビリーを殺害したギャレットはロバート・フォードとは異なり、大いに賞賛を受けた。しかし、1902年、ギャレットはオルガン山の麓で暗殺された。

ジェシーと比べると悪評が高いビリーだが、なぜ彼がジェシーと肩を並べるほど人気のあるヒーローになりえたのだろうか？ジェシーは、民衆の敵意の対象となる銀行や鉄道会社を襲ったのに対し、ビリーは牛や馬を盗んだ。当時、「牛馬を一頭盗めば縛り首にされたくらいに、それは忌み嫌われる行為」(亀井 262) だった。また、フォードとギャレッ

トに対する民衆の反応を比較しても違いは一目瞭然である。裏切り者と評されたフォードと比べ、ギャレットは称賛を受けた。生前からヒーローと見られていたジェシーと比べ、ビリーにはそういった面はなかった。しかし彼の死後、彼は憎まれる犯罪者からヒーローへと変化していくことになる。

犯罪者として死んだビリーだが、死後彼に関する本が多く出版された。彼を殺したパット・ギャレットもその著者の一人である。先述した『ビリー・ザ・キッドの信頼しうる生涯』である。ギャレットはビリーを好意的に描き、「魅力にみちたロマンティックなデスペラード」（亀井 266）に仕立てた。彼が作り上げた「ロマンティックなデスペラード」のイメージはその後のビリーに対するイメージを変えた。彼の新しいイメージは次々に作られた。ヒーロー性を与えるために女性とのロマンスを加え、荒野の騎士に仕立て上げられた。女性や子ども、病人や弱者には優しかったなども強調された。

ビリーのイメージの変容は、彼の容姿も変化させた。実際のビリーは「身長一メートル五〇センチちょっとで、手足も小さく、髪は荒野にすむ大鴉のように黒い。目は黒く野獣のように光り、前歯が突き出ている」（岡田 201）という容姿であった。しかし、その容姿も 1920 年ころになると、黒い髪や黒い目はアメリカ好みである金髪、青目になり身長も 20 センチ伸びた。そして、出っ歯であったことも忘れられた。こうしてビリーは、アメリカ人好みのヒーローへと変わった。

彼が大きく英雄として扱われるようになったのは彼の死後から 40 年たった 1920 年代からである。では、なぜ彼はこうした変化を遂げたのだろうか。その答えとして、アメリカ社会の変化が挙げられる。

彼が殺された 1881 年から、英雄として再生する 1920 年までの間に、アメリカは大きく変わった。植民地時代以来続いた西部開拓は終わり、1890 年にはフロンティアが消滅した。「アメリカは建国以来、移民の国であったがこのころ東欧や南欧からの新移民が大量に流入し、さらにはアジアからの移民も加わったため移民制限が始まってゆく。」（岡田 203）農業国だったアメリカは工業国となり、1920 年には都市人口が農村人口を上回った。西部の無法者は姿を消し、大都会のギャングが機関銃を乱射するようになった。「一九二〇年代のアメリカ人にとって、ジェシー・ジェームズやビリー・ザ・キッドは、過ぎ去った良き時代の良きアメリカを象徴する人物」（岡田 203）となったのである。

もともと移民の国であったアメリカだったが、さらに様々な人種がアメリカに流入したことにより、人々は不安に駆られた。また、社会の変化により、古き良きアメリカへの憧憬が重なった。不安の中で、人々は何か共有できるものを渴望したのである。そこで新しい時代のアメリカに合うように、ヒーローも新しく作り直した。ビリーはまさに、人々の不安、希望から生まれた英雄なのだったと考えられる。人々の思い、そして不安定な社会により一人の犯罪者がアメリカン・ヒーローへと変化を遂げたのであった。

(b) 映画の中のビリー

アウトロー、ビリー・ザ・キッドを主役にした映画もまた多く作られた。その中から、『ビリー・ザ・キッド 21 才の生涯』（*Patt Garrett and the Billy the Kid*）と『ヤングガン』

(*Young Guns*) を取り上げて、ビリーの描かれ方の変化をみていく。

『ビリー・ザ・キッド 21 才の生涯』では、保安官のギャレットを中心に物語は進んでいく。この映画では、ビリーがアウトローとして活躍する場面より、ギャレットがビリーを追い詰めていく姿が多く描かれる。映画では、保安官たちの腐敗した部分を多く描いていたように見える。ギャレットが多くの保安官を連れてビリーのアジトを襲い、容赦なくビリーの仲間たちを殺した。またビリーを捕まえた後、ギャレットをはじめとする保安官たちはビリーとカードゲームを始める。ビリーが一人の保安官を殺した後、町の人々は保安官に対し、憐れみの情を見せなかった。むしろ、ビリーの逃亡を歓迎しているようであった。また、ビリー暗殺直前のギャレットに対し町の男は、“You chickenshit, badge-wearing son of a bitch.” (腰抜け保安官め。) と言いつけている。

こうしたシーンは、その時代の社会背景が関係していると思われる。当時のアメリカ国民の政府に対する不信感の表れではないだろうか。1965年にベトナム戦争 (Vietnam War) が勃発し、泥沼化した。戦いの長期化に伴い多くの死傷者が出た。さらに、多額の戦費支出は財政を悪化させた。国内外で反戦運動が起こっていた。また、1972年にはウォーターゲート事件 (Watergate Scandal) が発覚した。大統領選挙中に、ウォーターゲート内にある民主党の本部から選挙資料が盗まれ、ニクソン再選委員会の者が盗聴器を仕掛けようとして逮捕された事件だ。この結果、ニクソン大統領 (Richard Milhous Nixon) は辞任に追い込まれた。こうした事件を通して、多くのアメリカ国民はアメリカ政府に不信感を抱くようになったのではないだろうか。その結果、この映画ではビリーよりもギャレット側に焦点を当て、ギャレットの腐敗した部分を描いたのではないだろうか。

一方『ヤングガン』では一変して、ビリーのアウトローとしての活躍を描いている。タンストールが殺され、その復讐を誓う。復讐のために、ビリーは多くの人間を殺していった。ビリーがいかにして復讐劇を成し遂げるのかが描かれている。『ビリー・ザ・キッド 21 才の生涯』とのビリーとはがらりと雰囲気が変わっているが、この変化はなぜ起こったのだろうか。1988年ころのアメリカ社会は、ベトナム戦争やウォーターゲート事件などで不安定な社会であったアメリカが復活を始める時代である。1981年に就任したレーガン大統領 (Ronald Wilson Reagan) は強いアメリカの復活を掲げた。ライバルであったソ連も冷戦の長期化などで弱体化し、アメリカは徐々に力をつけていった。そうした時代、社会背景があったからこそ、ビリーがアウトローではあるが、一人の強いアメリカン・ヒーローとして描かれるようになったのではないだろうか。また、国民はそうした姿のビリーを望んでいたのだろう。

結論

結局英雄の条件とは何だったのか。猟師であり、政治家でもあったデイヴィッド・クロケットはアラモの戦いで英雄として玉砕した。人々は彼の活躍を広めていったが、活躍以上に人々が社会に抱える不安な想いを重ねて伝承していった。また、西部のアウトローであったジェシー・ジェームズは、銀行強盗や殺人を犯したのにもかかわらず民衆から人気

があり、ヒーローであった。南北戦争後の不安定な社会に生きる人々は、負けた南部から誕生したアウトローなヒーローを歓迎した。同じく、西部のアウトローであったビリー・ザ・キッドは、21才という短い生涯の中多くの犯罪をおこし、人を殺した。しかし彼は時代を経て、犯罪者からヒーローへと変貌していった。

3人のヒーローを挙げて考えてきたが、彼らにはいくつか共通点があった。まず、彼らの人生の最期である。3人とも年老いて死んでいったのではなく、他の人の手によって人生の幕を閉じた。ある者は戦争の中で玉砕し、またある者は暗殺された。だが、その壮絶な最期により、彼らは悲劇的な人物になった。人々は嘆き悲しみ、彼らの活躍ぶりを伝承していった。最期が悲劇的であったからこそ、人々は英雄の生きざまに思いを馳せ、想像を膨らませていった。おそらく、彼らが悲劇的な死を迎えていなかったら、彼らは今のようなヒーローとはなっていなかったであろう。ヒーローという他の人とは違った、神話的な人物となるとその人生の終わらせ方も普通の人とは違って来るのだろう。そうした生き方、死に方を人々は求めている。波乱万丈な人生を送り、そして壮絶な死により3人は長く語り継がれるヒーローになった。

だが、彼らをヒーローへと変身させた大きな要因として、彼らを取り巻く人々が暮らす不安定な社会が挙げられる。例えばクロケットの場合、アメリカが領土拡大を進めていく時代、ネイティヴ・アメリカ人やメキシコ人などの衝突もあり、人々は不安な思いを抱えて暮らしていた。そうした不安な思いを託す相手に、アラモで玉砕したクロケットが選ばれたのだ。また、ジェシーにおいては南北戦争後の不安定な社会により人々は、特に南部側の人々は英雄の存在を欲した。たとえ負けてしまっても、そこから這い上がってくるようなヒーローを。ビリーをヒーローとして決定的にした1920年代の社会も不安定であった。古き良きアメリカを懐かしんだ人々が、アウトローであったビリーをヒーローに仕立て上げた。

結局、ヒーローの存在にとって大切なものは、ヒーローがいかに活躍したか、ということだけではなく、そのヒーローを取り囲む人々や社会も挙げられる。その社会の環境が悪ければ悪いほど、人々はより完璧なヒーローを求めるのであろう。したがって、同じヒーローであっても、時代の変化によりそのヒーロー像が変化していく、つまり、不変の存在ではないのだ。

ヒーローの条件として、例えば容姿の良さや、銃の腕前が一流であるなどが考えられるが、そういった事はまた別問題である。人々が抱える不安定さを解消できる、人々がその時代に望むような形でヒーローは作られる。物語の中ではヒーローは困っている人を助けるが、それは物語の世界だけではなく、間接的に現実世界の人々のSOSに応えているのであろう。

今後、ヒーローの存在が消滅することがあるだろうか。答えはNOであろう。人々が抱える不安、葛藤、悲しみが消えない限り、ヒーローは存在する。人間が人間として暮らしていく限り、ヒーローは活躍していくであろう。人間は、ヒーローを求めずにはいられない生き物なのかもしれない。

引用映画

American Outlaws. Dir. Les Mayfield. Morgan Creek Productions, inc., 2001. Film.
Patt Garrett and the Billy the Kid. Dir. Sam Peckinpah. Tuner Entertainment CO., 1973. Film.
The Alamo. Dir. John Lee Hancock. TouchstonePictures. 2004. Film.
The Alamo. Dir. John Wayne. Batjac company. 1960. Film.
The Assassination of Jesse James by the Coward Robert Ford. Dir. Andrew Dominik. Warner Bros. Entertainment, inc., 2007. Film.
Young Guns. Dir. Christopher Cain. Vestron Pictures. 1988. Film.

引用 Web サイト

BBC NEWS. http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/4636742.stm 11/12/2009
Person sheet. http://homepage.mac.com/james_keller/PS75/PS75_134.HTML
30/10/2009

引用文献

秋元英一・菅英輝『アメリカ 20 世紀史』東京大学出版会、2003 年。
池田智・松本利秋『早わかりアメリカ』日本実業出版社、2000 年。
海野弘『大西部の時代』（デビー・クロケット）集英社、1985 年。
岡田泰男『アメリカの夢 アウトローの荒野』平凡社、1988 年。
亀井俊介『アメリカン・ヒーローの系譜』研究社出版、1993 年。
鈴木晟・荒木教夫『面白いほどよくわかる アメリカ』日本文芸社、2006 年。
鶴谷壽『カウボーイの米国史』朝日新聞社、1989 年。
西江雅之『伝説のアメリカン・ヒーロー』岩波書店、2000 年。

Influence of native language on perception of second language speech

Masayuki Ota

Introduction

How do we perceive L2 sounds? This question has been discussed for a long time. Best (1995) has proposed that L2 phonemes are perceived on the basis of the difference between phonologically and phonetically language-specific features of a learners' L1 and L2. If a language, A, has two phonemes which are related to a pair of contrasting phonemes in another language, B, a speaker of language A can perceive this nonnative contrast. On the other hand, if a language has a single phoneme which is related to a pair of contrasting phonemes in another language, speakers of the first language cannot perceive this contrast. Kuhl (1991) has proposed that through the statistical distribution of ambient language, we lose sensitivity to stimuli near the prototype of a category and maintain sensitivity to stimuli along the boundaries by sometime around our first birthdays. That is, it seems that our perceptual space is distorted on the basis of phonologically and phonetically language-specific features of our L1. My proposal is that this distortion of L1 perceptual space has a direct effect on L2 perception. That is, we perceive L2 phonemes on the basis of the distortion of L1 perceptual space by phonologically and phonetically language-specific features (Kuhl, Williams, Lacerda, Stevens, and Lindblom 1991, Strange and Shafer 2008: 153-191). In the following section, I introduce these two theories of L2 perception. In the third section, I introduce support from two experiments. In the fourth section, I interpret those results in terms of the Perceptual Assimilation Model (Best 1995) and the perceptual magnet effect (Kuhl 1991, Kuhl et al. 1991, Kuhl and Iverson 1995). In the last section, I conclude with my view of how we perceive L2 phonemes.

1. Perception of non-native phoneme categories

Until now, the theory known as the Perceptual Assimilation Model (Best 1995) has been used to explain L2 perception among naïve listeners.

PAM considered both phonological and phonetic levels in explaining how the L1 system constrains the perception of nonnative phones that are completely unfamiliar to the listeners. . . . They can only recognize phonological distinctions in their own language, and phonetic deviations of the unfamiliar phones from their L1 phonemes (Best and Tyler 2007: p.18).

PAM proposed three assimilation patterns. The Two Category (TC) assimilation pattern predicts

very good to excellent discrimination accuracy, in which the two nonnative phones are perceived as acceptable exemplars of two different native phonemes. The Single Category (SC) assimilation pattern predicts poor discrimination accuracy, in which the two nonnative phones are judged as equally good or poor exemplars of the same native phoneme. The Category Goodness (CG) assimilation pattern predicts intermediate discrimination accuracy in which both of the contrasting nonnative phones are heard as tokens of a single native phoneme, but they differ in goodness of fit to that phoneme. That is, from the view of the PAM, we perceive L2 phonemes on the basis of differences between phonologically and phonetically language-specific features of L1 and L2.

There are numerous languages around the world. Of course, each language has its own phonologically and phonetically language-specific features. Actually, the PAM can account for most L2 perception patterns. However, speakers of different languages may not perceive L2 sounds in the same way even when their languages are categorized as the same pattern according to PAM. That is, we should have different L2 perception patterns across languages because each language has its own phonologically and phonetically language-specific features. If this is right, on what basis do we perceive L2 phonemes? The following two experiments give critical insight to address this question.

Kuhl (1991) examined phonetic prototypes for vowels. The first two experiments studied perception among adults. They showed different goodness ratings for each of various stimuli within a single category. A specific region, the prototype, gained the highest ratings and the farther the stimuli were from that region, the lower ratings the stimuli gained. This means that all stimuli were not perceived equally; rather they were perceived in relation to category goodness. An identification task among adults also showed specific roles of the prototype. The prototype assimilated other surrounding stimuli. That is, “the prototype of the category thus serves as a powerful anchor for the category, and the prototype’s functional role as a perceptual magnet for the category serves to strengthen category cohesiveness” (Kuhl 1991: p.99). These results suggest that adults’ vowel categories are internally organized with reference to category goodness.

In the next experiment, Kuhl (1991) focused on infants’ perception. The same stimuli were used in this experiment. Results were parallel with those for adults. The nearer the stimuli were to the prototype, the stronger the trend was that those stimuli were assimilated with the prototype. This result demonstrates that infants 6 months old also have internal structure of the category. By 6 months of age, infants have heard a considerable amount of ambient language input, and this might be sufficient to alter perception.

In this study, it was shown that the prototype has a specific role; it pulls surrounding stimuli to a prototype as a perceptual magnet. This means that “the perceptual space underlying a phonetic category is distorted such that the perceptual distance around a prototype is reduced” (Iverson and Kuhl., 1995: p.553). That is, “the magnet effect implies that the area around a phonetic prototype is associated with reduced discrimination sensitivity” (Kuhl and Iverson 1995: p.131).

Iverson et al. (1995) conducted a series of experiments to examine that implication in detail using adult speakers of English. In experiment 1, they used 13 continuous stimuli including the prototype

and non-prototypes from Kuhl (1991). Subjects were asked to identify the 13 stimuli as either the vowel in “he” (/i/) or the vowel in “hey” (/e/). Also, they rated them using a 7-point rating scale. The results showed that only four stimuli with higher F1 and lower F2 were identified as the vowel /e/ with greater than 50 % accuracy, and goodness ratings got higher as F1 decreased and F2 increased, and they got lower as F1 increased and F2 decreased.

In experiment 2, subjects heard two stimuli on each trial and judged whether they were the same or different. Either the prototype or the non-prototype (Kuhl 1991) was paired with one of the tokens 30, 60, or 90 units away in both directions on a perceptual scale known as the mel scale. The results showed that subjects were significantly worse at discriminating stimuli from the prototype than from the non-prototype, supporting the findings of Kuhl (1991). In other words, the perceptual magnet effect reduced sensitivity only to acoustic differences near prototypic stimuli.

In experiment 3, they employed multidimensional scaling (MDS) to examine whether the perceptual space underlying the vowel category is distorted. Subjects heard all possible pairs of the 13 tokens at three different inter-stimulus intervals, or ISIs (25, 250, and 2500 msec) and judged whether the tokens in each pair were the same or different. Their response (“same” or “different”) and reaction time (RT) were recorded for each trial. In the results, the perceptual magnet effect was apparent at all three ISIs. The prototype acted as a perceptual magnet by drawing tokens toward the prototype in the perceptual space. The use of MDS showed that the magnet effect causes a distortion of the perceptual space in the region of the prototype. These results suggest that perception within a speech category is not equivalent over the entire category. The best instances of the category are associated with reduced discrimination and perceptual shrinking.

From the data of all three studies, it was shown that native categories, at least vowel categories, are internally structured; a category has its best perceptual exemplar which pulls surrounding tokens toward it like a perceptual magnet. By this effect, we become less sensitive to differences in the region near a prototype than in regions far from it. That is, we maintain sensitivity to the boundary between two categories and lose it to tokens within a category. Thus, both infants and adults can discriminate phonetic units that straddle the boundaries between two native categories, but fail to discriminate phonetic units that fall within a single native category.

Infants are born with ability to discriminate almost all phonetic contrasts even if they do not belong to the set of their native phonemic categories. However, around 6 months from birth, their ability starts to change; they are no longer able to discriminate nonnative contrasts which they could do previously. This means that infants’ exposure to their ambient language alters their perceptual sensitivity to phonemic categories. The best exemplar of a category draws other tokens around it like a perceptual magnet and those tokens are assimilated with the prototype. On the other hand, tokens far from the prototype remain independent of the perceptual magnet effect, so the sensitivity between categories is maintained. In other words, we locate stimuli in the perceptual space of L1 categories and perceive them on the basis of that rather than perceive phonemes as themselves.

In this way, by 12 months of age, infants are sensitive to the basic perceptual space that is specific

to their own native language. After that, their perceptual sensitivity comes to be higher than ever between native phonetic categories and lower within categories. However, what we must not forget is that each language has phonologically and phonetically language-specific features. From this point, it can be predicted that speakers of different languages would have different perceptual spaces, distorted in the process of L1 acquisition, in terms of their own native language. If this prediction is right, we may perceive L2 phonemes on the basis of the distorted perceptual space. In the next section, I introduce experiments supporting this prediction.

2. The role of category structure in perceptual assimilation

Iverson, Ekanayake, Hamann, Sennema, Evans (2008) examined native Sinhala, German and Dutch speakers and compared them with native English speakers in terms of their perception of the American English /w/-/v/ contrast. Sinhala and German both have one phoneme (/ʋ/ for Sinhala and /v/ for German) that is similar to both English /w/ and /v/. Dutch has two related phonemes (/ʋ/ and /v/). The Sinhala /ʋ/, German /v/ and Dutch /ʋ/ are all similar in manner, except that the German /v/ is transcribed as a voiced fricative while the others are transcribed as approximants. Although both speakers of Sinhala and speakers of German have one related L1 phoneme, their ease of learning the English /w/-/v/ contrast is different; Sinhala speakers have considerable difficulty learning this contrast even after decades of living in an English speaking country, but German speakers seem to be able to learn this contrast through classroom instruction. Dutch speakers do not have any difficulty at all discerning it.

A set of 16 synthesized /a:wa: /-/a:va: / stimuli varied along two dimensions (manner and place), with four steps along each dimension. F2 (place) varied across four steps (680, 875, 1112, and 1400 Hz, from /w/ to /v/). F1 (manner) also varied across four steps (316, 267, 223 and 182 Hz, from /w/ to /v/). Subjects were recorded reading accent-revealing sentences and these recordings were rated by phonetically trained native English speakers. Also, subjects heard and identified all stimuli, and rated their goodness in terms of their L1 phoneme and L2 phoneme (English /w/ or /v/). Moreover, they heard pairs of stimuli, rated their similarity, and judged whether they were the same or different. These results were represented by MDS scaling. With regard to the results of Sinhala and German speakers, they were divided into two groups based on whether their identification accuracy of syllables naturally recorded by native English speakers was over 75% or not (high-accuracy and low-accuracy groups). I omit the results of the high-accuracy groups because their perceptual spaces were completely different from those of low-accuracy groups, which should be similar to those of naïve listeners, as the change in perceptual space may not be caused only by the effects of L1 but also by exposure to L2.

The results of Dutch speakers were closest to those of native English speakers. The identification accuracy of syllables naturally recorded by native English speakers was more than 90%. In the identification task, they clearly divided this stimulus space into two categories in terms of both L1

and L2 phones. In the results of the discrimination tasks, they showed low discrimination accuracy within those categories and high discrimination accuracy between them. In the MDS, they also indicated a stretching between those categories as English speakers do. The difference between Dutch and native English speakers was that Dutch speakers tended to use the manner dimension more than English speakers. This is because the difference between Dutch /ʊ/ (labiodental approximant) and /v/ (labiodental fricative) is manner of articulation. From this point, it seems that Dutch speakers perceived English /w/ and /v/ phonemes in terms of their L1 phonemes and assimilated them to Dutch /ʊ/ and /v/ phonemes, respectively. Also, perceptual spaces in those categories were shrunk. This means that they showed the magnet effect on both nonnative categories.

Although both speakers of Sinhala and speakers of German have one phoneme that is similar to English /w/ or /v/, their results were significantly different from one another. Actually, on an identification task, low-accuracy Sinhala speakers identified almost all of the 16 stimuli as mediocre exemplars of their /ʊ/, and none of them was rated as a good exemplar. In contrast, low-accuracy German speakers consistently rated the stimuli with 182 Hz on the F1 dimension and 1112 Hz on the F2 dimension as good exemplars of their /v/, but some other surrounding stimuli were rated as poor exemplars of it. Moreover, the stimulus with lowest F1 and F2 was rated as the poorest exemplar of the category. In the MDS, the low-accuracy Sinhala group showed shrinking for these stimuli rather than a distinct grid; most of these stimuli appeared to overlap one another. On the other hand, the low-accuracy German speakers showed some stretch at the English /w/-/v/ boundary but less than the high-accuracy German speakers, whose stretch was not significantly different from Dutch or English native speakers.

Results reported by Iverson, Kuhl, Akahane-Yamada, Diesch, Tohkura, Kettermann, Siebert (2003) also paralleled the results of the previous experiment. They examined how L1 language experience affects L2 perception for native speakers of Japanese, German and English. They synthesized 18 stimuli which varied in terms of F2 (three steps: 744, 1003 and 1301 Hz) and F3 (six steps: 1325, 1670, 2067, 2523, 3047 and 3649 Hz) during the initial consonant. The formant frequencies were equally spaced on the mel scale. There were three procedures; subjects identified each stimulus in terms of their own native-language phonemes, rated the acoustic similarity of stimulus pairs on a scale from 1 (bad) to 7 (good), and judged whether pairs of stimuli were the same or different.

Native English speakers divided the stimulus space into two separate categories, English /r/ and /l/ clearly, along the F3 dimension. They identified the low F3 stimuli and the high F3 stimuli as good exemplars of English /r/ and /l/ phonemes, respectively. According to the MDS solutions, this stimulus space was stretched at the middle of the F3 scale and the spaces in lowest and highest F3 regions were shrunk. This indicated that English speakers had the boundary between /r/ and /l/ categories at the middle of the scale along the F3 dimension. Also, the shrinking at both sides of the F3 dimension demonstrated the magnet effect within these categories.

Native German speakers also divided this stimulus space into two categories, the German uvular fricative /ʁ/ and /l/ along the F3 dimension. They identified the high F3 stimuli as good exemplars of their /l/. However, the low F3 stimuli were heard as poor exemplars of their uvular fricative. The results of the discrimination task showed a similar pattern to that of native English speakers, but German speakers had higher sensitivity within the English /r/ category. This point reflects the result of the identification task; they identified English /r/ stimuli as poor exemplars of their uvular fricative. According to the MDS, they had broader stretching of perceptual space in the middle of the F3 dimension, but their category boundary was less sharp than for English speakers. Also, there was shrinking at the lowest and highest values of F3, but the shrinking at the high end of the F3 dimension was stronger. These results of MDS scaling also demonstrated that German speakers showed the magnet effect in L2 perception.

The results for native Japanese speakers were completely different. They identified all of these stimuli as their /r/, although they tended to identify a low F2-mid F3 stimulus as a poor exemplar of their /w/. The discrimination results indicated that Japanese speakers had increasing sensitivity as F3 increased, with no peak in sensitivity at the English /r/-/l/ boundary. The MDS solution showed that they were more sensitive to variation in F2 than F3, and had no marked stretching of the perceptual space in the middle of the F3 dimension. Compared with English speakers, Japanese subjects had significantly higher sensitivity within the English /l/ category. These results did not show a magnet effect in the stimulus space. In the next section, I interpret these results in terms of predictions made by the PAM and my own hypothesis.

3. Discussion

Firstly, the PAM predicts that when two contrasting nonnative phonemes are categorized into two respective native phonemes, discrimination accuracy will be good to excellent. This prediction is completely supported by the results from Dutch and German speakers. Dutch speakers have two native phonemes related to the English /w/ and /v/ phonemes, and they identified those English phonemes as separate native phonemes. Moreover, they showed a boundary between those two categories and perceptual shrinking within them. Their performance was similar to that of native English speakers. Also, German speakers have two phonemes which are related to English /r/ and /l/ phonemes, and they identified English /l/ as a good exemplar of their /l/ and English /r/ as a poor exemplar of their uvular fricative. Moreover, they showed a boundary between those categories and shrinking within the English /l/ category. Their performance was not significantly different from English speakers. These results indicate that both groups of speakers can discriminate those nonnative contrasting phonemes easily.

Secondly, the PAM predicts that when both of the contrasting nonnative phones are heard as tokens of a single native phoneme, but they differ in goodness of fit to that phoneme, discrimination accuracy will be intermediate. This prediction agrees with the results from low accuracy German

speakers. German speakers have only one native phoneme /v/ which is similar to contrasting English /w/ and /v/ phonemes, so they identified those English phonemes as instances of the single /v/ phoneme. However, they tended to identify stimuli of English /v/ phoneme as good exemplars of their /v/ and to identify some stimuli of English /w/ phoneme as poor exemplars of it. So, they showed weak stretching between those two categories, which was less clear than for native speakers of English. This indicates that they have enough sensitivity to discriminate them, but this sensitivity is much less than that of native speakers.

Lastly, the PAM predicts that when two nonnative phones are judged as equally good or equally poor exemplars of the same native phoneme, discrimination accuracy will be poor. This prediction receives support from the results from low accuracy Sinhala and Japanese speakers. Sinhala speakers have only one phoneme that is similar to English /w/ or /v/, so they identified all of the 16 stimuli as mediocre exemplars of their /v/, and none of them was rated as a good exemplar. They did not show stretching of the stimulus space; rather the stimulus space was shrunk toward the center. Japanese speakers also have only one phoneme that is similar to a pair of English phonemes /r/ and /l/, so they identified all of the stimuli as mediocre exemplars of their /r/ except for one stimulus item that was identified as a poor exemplar of their /w/. However, their ratings of category goodness increased as F2 increased. So they show stretching along the F2 dimension, but they did not show stretching at the middle of the scale for F3, which is critical to the English /r-/l/ contrast. These results indicate why they have significant difficulty in discriminating those nonnative contrasting phonemes.

As these findings have shown, the predictions of the PAM can be applied to L2 perception among speakers of all the languages studied. It seems that the PAM provides an accurate account of L2 perception. However, there were differences between the languages in the results of MDS solutions as I hypothesized. The MDS scaling of Japanese and Sinhala speakers' perceptual sensitivity was completely different despite the fact that both languages meet the PAM definition for Single Category assimilation. In the MDS of Sinhala speakers, differences among all the stimuli were shrunk together at the center of the stimulus space. This means that Sinhala speakers do not have perceptual sensitivity anywhere in this stimulus space. On the other hand, even though the phonological conditions were the same, the results from the Japanese subjects indicated that they were entirely unable to discern differences among these phonemes. Japanese speakers did not show stretching at the boundary between English /r/ and /l/, but they had significant stretching along the F2 dimension, which is irrelevant to the English /r-/l/ contrast, and the perceived distance between adjacent stimuli along the F3 dimension increased as F3 increased. Their perceptual distortion made acoustic variation that is irrelevant for categorizing these phonemes more salient than the critical differences in F3. This means that Japanese speakers have a distorted perceptual space for these phonemes, but not a total lack of perceptual sensitivity.

The reason why Japanese speakers showed stretching along F2 may be that, in their perceptual space, there is another category space /w/ below the stimulus space and Japanese speakers use F2 as

a cue to discriminate their /r/ from /w/. On the other hand, the reason why the low accuracy Sinhala speakers did not show any stretching along both F1 and F2 dimensions may be that Sinhala speakers have allophonic variation in their native /ʊ/ phoneme. The results of natural stimulus identification in the experiment reported by Iverson et al. (2008) indicated that their identification of English /w/ and /v/ phonemes was heavily influenced by the vowel context; they tended to identify stimuli as /v/ when F2 of the following vowel was high (/i:/) and as /w/ when F2 of the following vowel was low (/u:/ and /a:/). From this finding, it seems that they have two different patterns which are somewhat similar to those of English /w/ and /v/ phonemes, respectively. However, they sound the same because they are categorized as a single native phoneme. So they may have a much broader perceptual space for the /ʊ/ category than Japanese speakers have for their /r/ category.

This difference between Japanese speakers and Sinhala speakers in MDS of discrimination indicates that each language has its own type of distortions on the mental perceptual space. From Kuhl's reports, the perceptual space of a category is distorted; the perceptual space near the prototype is shrunk, and the perceptual space far from it is stretched as though the prototype functions as a perceptual magnet. However, this phenomenon has been focused on single categories. If two or more categories are adjacent to one another, the distortion of perceptual space should change depending on the location of those categories within the perceptual space. Thus, the distortions of perceptual space vary across languages, probably because phonological inventories and phonetic features vary across languages, and perceptual space is distorted by language-specific phonetic and phonological properties of each language. In the next section, I conclude how we perceive L2 phonemes.

Conclusion

According to the PAM, L2 speech sounds are perceived in terms of one's native language. In other words, phonologically and phonetically language-specific features interfere with perception of L2 phonemes. If a language has two contrasting native phonemes which are similar to two contrasting nonnative phonemes, its speakers can discriminate those nonnative phonemes correctly. In contrast, if a language has only one phoneme which is similar to two contrasting nonnative phonemes, its speakers can hardly discriminate them. However, if contrasting nonnative phonemes are assimilated to a single native category, but the degree of goodness to which each phoneme is assimilated is different, discrimination accuracy is intermediate. These predictions have been supported by the results for all languages studied.

However, there were perceptual differences between Japanese speakers and Sinhala speakers whose languages both have only one phoneme which is similar to two contrasting nonnative phonemes with goodness ratings for each of the contrasting phonemes that were almost the same. Although speakers of both languages did not have a boundary between English contrasting phonemes, Sinhala speakers did not have sensitivity along either the place or manner of articulation

dimension while Japanese speakers showed sensitivity along the F2 (place) dimension, which is irrelevant to the English /l/-r/ contrast. This indicates that there are different perceptual spaces across speakers of different languages and that we perceive L2 stimuli through the distortion of our perceptual space caused by our L1.

Kuhl (1991) has suggested that the prototype of a category shrinks the perceptual space near the prototype and stretches the space far from it. The nearer the stimuli in a category are to the prototype, the more difficult it is to discriminate them. That is, the prototype in a category has the function of distorting the perceptual space around it. The most important factor is that there are phonetic and phonological differences across languages. From the MDS results, it seems that the number and the location of categories in a certain perceptual space have important effects on the distortion of the perceptual space, and perception of L2 sounds is limited by this distortion.

Japanese speakers do not have two related phonemes to English /r/ and /l/, so they need not rely on sensitivity at the middle of the F3 range tested experimentally. This is the reason why Japanese speakers did not show stretching at the middle of that F3 range. Also, they showed stretching along F2 because another native Japanese category, /w/, exists in the stimulus space with a lower F2; Japanese speakers may discriminate /r/ from /w/ on the basis of the F2 dimension. Moreover, compared with low accuracy Sinhala speakers, Japanese speakers showed slightly more stretching along the F3 dimension, although this did not mean that Japanese speakers had perceptual sensitivity that could discriminate the English /r/ and /l/ contrast. This may indicate that the stimulus space is near the boundary between Japanese /r/ and /w/ categories with the Japanese /r/ category outside this stimulus space. Therefore, they could not discriminate them but there was greater stretching of the stimulus space than there was for Sinhala speakers. These language-specific features caused the distortions seen in MDS, which is stretched along the F2 dimension.

Like Japanese speakers, Sinhala speakers have only one native phoneme /ʊ/ that is related to nonnative contrasting phonemes, /w/ and /v/. However, their /ʊ/ phoneme has allophonic variation which is heavily influenced by a following vowel context. From reports that this kind of variation affects the identification of naturally recorded English syllables that include English /w/ and /v/ phonemes, it seems that these variants have at least some phonetic similarity to them. So, Sinhala speakers have a much broader /ʊ/ category because the category includes those two allophonic variants, which are phonetically different but heard as the same. Also, this language-specific feature caused the distortion seen in the MDS analysis which showed shrinking along both place and manner dimensions and may cause the extreme difficulty Sinhala speakers have acquiring English /w/ and /v/ phonemes even after decades of experience.

Thus, it is clear that we have phonetic and phonological, language-specific perceptual distortions and these distortions have a direct influence on L2 speech perception. The PAM places the source of L2 perception on the differences between phonologically and phonetically language-specific features in L1 and L2, while this paper places the source of L2 perception on the distorted perceptual spaces caused by phonetic and phonological, language-specific features of a learner's L1.

We perceive L2 phonemes on the basis of the distortion in perceptual space like pieces on a chess board. In other words, the distortion in perceptual space caused by phonetic and phonological, language-specific features directly interferes with L2 speech perception.

Bibliography

- Best, C. T. (1995) A direct realist view of cross-language speech perception. In W. Strange (ed.), *Speech perception and linguistic experience: Issues in cross-language research*, pp. 171-204. Timonium, MD: York Press.
- Best, C. T. and Tyler, M. D. (2007) Nonnative and second-language speech perception: Commonalities and complementarities. In O.-S. Bohn and M.J. Munro (eds.), *Language experience in second language learning*, pp. 13-34. Amsterdam: John Benjamins.
- Patricia K. Kuhl. (1991) Human adults and human infants show a perceptual magnet effect for the prototypes of speech categories, monkeys do not. *Perception & Psychophysics* 50: 93-107.
- Kuhl, Patricia K., Karen A. Williams, Francisco Lacerda, Kenneth N. Stevens and Bjorn Lindblom (1991) Linguistic experience alters phonetic perception in infants by 6 months of age. *Science* 255: 606-608.
- Kuhl, Patricia K. and Paul Iverson (1995) Linguistic experience and the “Perceptual Magnet Effect.” In [Winifred Strange](#) (ed.), *Speech Perception & Linguistic Experience: Issues in Cross-Language Research*, pp. 121-154. Timonium, MD: York Press.
- Iverson, Paul and Patricia K. Kuhl (1995) Mapping the perceptual magnet effect for speech using signal detection theory and multidimensional scaling. *Journal of the Acoustical Society of America* 97: 553-562.
- Iverson, Paul, Dulika Ekanayake, Silke Hamann, Anke Sennema and Bronwen G. Evans (2008) Category and perceptual interference in second-language phoneme learning: An examination of English /w/-/v/ learning by Sinhala, German, and Dutch Speakers. *Human Perception and Performance* 34(5): 1305-1316.
- Iverson, Paul, Patricia K. Kuhl, Reiko Akahane-Yamada, Eugen Diesch, Yohich Tohkura, Andreas Kettermann and Claudia Siebert (2003) A perceptual interference account of acquisition difficulties for non-native phonemes. *Cognition* 87: B47-B57.
- Strange, Winifred and Valerie L. Shafer. (2008) Speech perception in second language learners: The re-education of selective perception. In J.G. Hansen Edwards and M.L. Zampini (eds.), *Phonology and Second Language Acquisition*, pp153-191. Amsterdam: John Benjamins.

日本人英語学習者の複合名詞句の習得

西海 茉優

序章

英語ではりんごが大好きな人のことを *apple-lover* と言えるが、*apples-lover* とは言えない。これは *apple* という規則名詞が複合語の中では複数形になれないという制限が働くためである。本研究ではまず、複合語の産出タスクを行ない、日本人英語学習者の産出する複合語の誤りにどのようなものがあるか調査した。次に産出タスクで見られた誤りを参考にして、複数形規則名詞の複合語と語順に関する判断タスクを実施した。ここでは日本人英語学習者が複数形規則名詞の複合語を容認するか、語順の誤りを容認するか、また、英語の熟達度の違いに応じて容認率に違いが見られるか調査し、それらの結果を報告する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第 1 章で複合語の理論的背景を説明する。第 2 章で先行研究として Gordon (1985)、Clahsen (1995)、Lardiere (1995)、Murphy (2000) を紹介する。第 3 章で本研究の産出タスク、第 4 章で複合語の判断タスク、第 5 章で語順の判断タスクの実験結果を説明し、議論する。

第 1 章 理論的背景

1.1 レベル順序付け仮説 (level ordering hypothesis)

- (1) something which wipes fingers → a. **a fingers wiper / a finger wiper*
- someone who eats rats → b. **a rats eater / a rat eater*
- someone who eats mice → c. *a mice eater / a mouse eater*

英語の複合名詞には、非主要部名詞 (non-head noun: NHN) を複数形にできないという規則が働く。しかしこの規則は、NHN が不規則名詞の場合には当てはまらない。従って、(1a, b) の複数形規則名詞を含む複合語は許容されないが、(1c) の *a mice eater* は許容される。この理論に関して Kiparsky (1983) のレベル順序付け仮説は、接辞付加や複合語形成の語形成はレベルごとに順序立てられると説明している。

表 1 に示すように、規則名詞と不規則名詞の複合語形成は三つの段階に分けることができ、Level 1 で不規則変化、Level 2 で複合名詞化、Level 3 で規則変化の処理が起きる。よって *rat* のような規則名詞では、複合名詞化の後に複数形の *-s* 付加が起こるため (Gordon, 1985)、**rats-eater* とはならない。一方で不規則変化は複合名詞化の前に起こり、*mice-eater* という複合名詞が許容される。

表1 規則名詞と不規則名詞の複合語形成レベル

Level 1 不規則変化	Level 2 複合名詞化	Level 3 規則変化	完成形
----- mice { rat eater mouse → { mice eater } eater	----- { rat → rat-eater eater mouse → mice-eater eater	rat → rats ----- rat-eater mice-eater	rats mice rat-eater mice-eater

1.2 二重機構モデル (Dual-Mechanism Model)

規則変化と不規則変化にはそれぞれ特有の処理形態が存在する (Murphy, 2000)。規則名詞はある特定の屈折形態素 (例 plural [-s]) がある特定の語幹に結びつく (例 cat+ [-s] = cats) 文法ルールに従って習得される。一方で、不規則名詞は単語と単語のペア (例 mouse-mice, goose-geese) として個々に記憶される。

第2章 先行研究

本実験の説明をする前に複数形規則名詞を含む複合語の産出について扱っている先行研究を取り上げる。

2.1 英語母語話者の研究

2.1.1 Gordon (1985)

Gordon (1985) では子供の英語母語話者を年齢別に3グループ (3;8, 4;6, 5;6) に分けて複数形規則名詞の複合語に関する実験を行った。まず子供に複合語生成の指導を行った後に、口頭で X-eater という形の複合語を産出するように指示した。質問と回答の形式は (2) に示してある通りで、複数形規則名詞八つ、複数形不規則名詞五つを使用した。

(2) “What do you call someone who eats X (例 rats) ?”

Answer: An X (例 rat/rats) eater .

表2 実験で使用した規則名詞と不規則名詞

規則名詞	baby, cat, bone, shoe, hand, dress, animal, student
不規則名詞	child, mouse, tooth, foot, man

レベル順序付けモデルの制約が働けば、(X) が規則名詞の場合、複数形を含む複合語は産出されず、(X) が不規則名詞の場合、複数形を含む複合語が産出されるという予測

が立つ。実験の結果、単数形規則名詞の使用率は 98%で、複数形規則名詞の複合語（例 *rats-eater）はほとんど産出されず、一方で不規則名詞は 90%が複数形（例 mice-eater）で産出された。つまり、子供の母語話者にはレベル順序付けモデルの制約が働いており、彼らは規則名詞と不規則名詞をはっきりと区別して扱っている。これを受けて、Gordon (1985) は母語話者の規則名詞と不規則名詞の使用に関する違いはインプットに頼ったものではなく、母語話者が形態素処理に関する知識を生得的に持っていることを主張した。

2.2 第二言語学習者の研究

2.2.1 Clahsen (1995)

Clahsen (1995) では、ドイツ語を第二言語とする大人のロマンス語母語話者を対象に、複数形名詞の習得に関する調査を行った。ドイツ語の複数形形成は英語よりも複雑で、不規則変化の名詞が非常に多い。この実験では被験者の普段の会話を長期間録音してデータを採取した。結果として、Clahsen (1995) はドイツ語の複数形形成に関して規則名詞と不規則名詞では全く別のシステムが見られると結論づけた。つまり、不規則名詞の複数形は複合語に現れ、規則名詞の複数形は複合語に現れないことになる。従って、これらのデータは二重機構モデルとレベル順序づけモデルを支持すると言える。また、これらの結果は以上のモデルや制約が「形態素習得の初期段階から存在する」(Clahsen, 1995, p. 136) という Gordon (1985) の主張を支持している。

まとめると、Clahsen (1995) により、複合語とそれに伴う複数形形成に関しては、第二言語文法の発達は母語習得と同様のメカニズムや制約に影響されているということが確認された。つまり、レベル順序付けモデルにある制約が生得的なものであり、母語習得と第二言語習得の両方に当てはまるものであると結論づけた。

一方、Clahsen (1995) とは異なる結論を出した研究も存在する。はじめに Lardiere (1995) を紹介する。

2.2.2 Lardiere (1995)

Lardiere (1995) では、大人の英語学習者で母語がスペイン語のグループと、母語が中国語のグループを対象に複数形規則名詞の複合語の研究を行った。手順、使用した名詞は Gordon (1985) と同様である。

実験の結果、両グループともレベル順序付けモデルの制約に反して複数形規則名詞を含む複合語を産出することが判明した。単数形規則名詞を正しく使用できた割合が 49%で、これは Gordon (1985) とは対照的な結果となった。このことから大人の第二言語学習者にはレベル順序付けモデルの制約が有効でないと言える。ただし、両グループの産出率には大きな差が見られた。中国語を母語とするグループの方が複数形規則名詞を使用する率が低く、正しく複合語を産出できた割合が高かった。ここで Lardiere (1995) は、もし Gordon (1985) の主張するようにレベル順序づけモデルの制約が生得的なものであれば、両グループの結果に差が出るのは理論的でないと指摘している。Lardiere (1995) の結果を見る限りでは、第二言語学習者にはレベル順序付けモデルの制約が働いていない。

二重機構モデルに関しては、両グループともに規則名詞の方が不規則名詞より単数形の使用割合が多いことから、この二つを区別して扱っていることは確かである。

2.2.3 Murphy (2000)

Murphy (2000) では、大人の母語話者は複合語の中で複数形を産出するのか、また、第二言語学習者は母語話者と同じ反応を示すのかを調べることを目的とした。三つのレベルに分けられた英語を学習しているフランス語母語話者 100 名 (平均年齢 12.4 歳) と大人の英語母語話者 15 名 (平均年齢 24.2 歳) を被験者とした。実験手順、使用した名詞は Gordon (1985) と同様である。

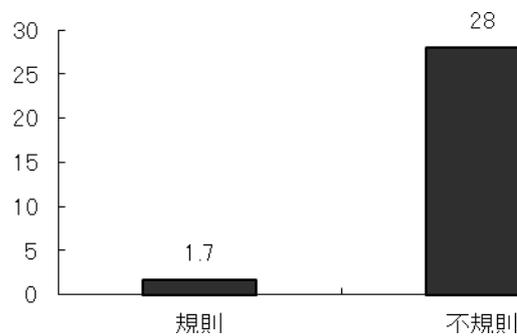


図 1 英語母語話者の複数形規則名詞と複数形不規則名詞の産出割合 (%)

実験の結果、母語話者の複数形規則名詞を含む複合語の産出は 1.7%であったため、Gordon (1985) と同様に母語話者にはレベル順序付けモデルの制約が働いていると言える。

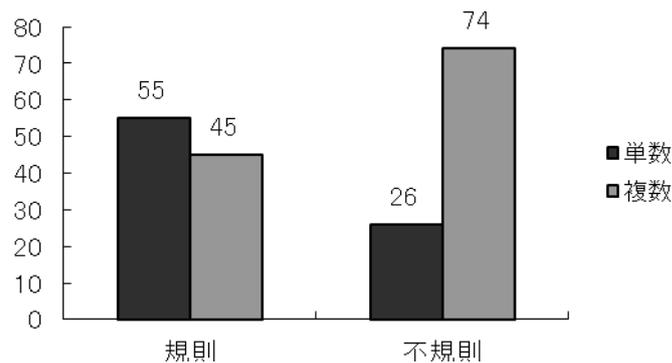


図 2 フランス語母語話者の英語の規則名詞、不規則名詞における単数形・複数形の産出割合 (%)

一方で、フランス語母語話者は単数形規則名詞の産出が 55%で、複数形規則名詞の産出も見られる結果となった。つまり、母語話者と比べてフランス語話者はレベル順序付けモデルの制約を受けていないと考えられる。次に規則名詞と不規則名詞の単数形・複数形の

産出割合をしてみる。規則名詞の場合は単数形>複数形、不規則名詞の場合は複数形>単数形となった。つまり、フランス語母語話者は、複数形を不規則名詞の複合語により多く使用していて、規則名詞と不規則名詞を区別して扱っている。また被験者の個人データに着目すると、被験者 100 名中 8 名が複数形規則名詞を産出していて、残りの 92 名は一貫して単数形を使用する傾向があった。

2.3 先行研究の結論

母語話者は、Gordon (1985)、Murphy (2000) とともにほぼ 100%に近い結果で複合語において複数形規則名詞を使用していない。つまり、母語話者の形態素システムにはレベル順序付けモデルの制約が働くと考えられる。

第二言語学習者の場合、Clahsen (1995) では複数形規則名詞を含む複合語を産出していない。しかし Lardiere (1995)、Murphy (2000) の第二言語学習者は複数形規則名詞をほとんどの被験者が産出する結果となり、レベル順序付けモデルの制約が必ずしも働いているとは言えない。ただし規則名詞と不規則名詞における単数形の使用割合に差が見られることから、これらを何らかの区別をしながら使用していると思われる。

第 3 章 実験 I (産出タスク)

本実験を実施する前に複合語の①産出タスクを行い、その結果で見られた日本人英語学習者の誤りや産出の特徴を基に、②判断タスクを実施した。まず 3.1 で産出タスクの実験概要と結果を紹介する。

3.1 実験概要

ここでは先行研究の結果を受け、日本人英語学習者は複数形規則名詞を産出するのか、また母語話者には見られない形の複合名詞を産出するのかという 2 点を中心に検証した。被験者は日本語を母語とする中央大学生の英語学習者 10 名で、実験は質問に答える産出形式(記述式)で実施した。今回使用した実験マテリアルは若林(2008)で使用したものと同一である。被験者にパワーポイントで作成されたスライドを見せると同時に音声による質問を与え、回答を記述する形式である。スライドにはある物体(例:猫、歯、靴)に対して動作をしている人間の写真と、その状況を説明する英語の一文、英語の質問文が書かれている。質問文は音声でも与えられ、被験者には写真の人間を表わす英語を回答用紙に記述してもらった。問題数は 38 題で、使用した名詞(物体)と動詞は表 3 に示す通りで、それぞれ単数形と複数形の場合とがある。出題順序に規則性はない。実験手順は(3)に示す通りである。

- (3) i. パワーポイントを使って何かの動作をしている人物の写真を見せ、同時に音声によるコンテキストを与える
- ii. 質問を与える: (例 What could you call someone who breaks bones?)

- iii. その人物を一語の英語でなるべく多く記述させる
(例 *a bones breaker, a bone breaker)

表3 産出タスクで使用した名詞・動詞

名詞	規則名詞	baby (s), cat (s), bone (s), shoe (s), student (s), dress (es), hand (s), dish (es), sock (s)
	不規則名詞	child (children), mouse (mice), tooth (teeth), foot (feet), man (men)
動詞		protect, watch, break, clean, kick, wear, wash, rip

今回の実験では複数形規則名詞の産出に着目することに加え、N-V-er の形にこだわらず、できるだけ多くの複合語のタイプを産出させることで、日本人英語学習者の複合語の特徴や誤りを検証することも目的としている。なお、今回は写真の物体が単数（例 猫が一匹）複数（例 猫が二匹）の場合の両方を出題したが、3.2 の実験結果は複数の場合についてのみ記載してある。

3.2 実験結果

まず規則名詞についての結果を説明する。図3に示してある通り、複数形規則名詞の複合語の産出は Ns-V-er (29%)、Ns-V-ing-person (13%) となり、それぞれ単数形のタイプよりも高い割合で産出される結果となった。明らかにレベル順序付けモデルの制約が働いていないと言える。また、一貫して複数形規則名詞を産出した人は1名のみで、ほとんどの被験者が複数形規則名詞と単数形規則名詞の両方を産出していた。複数形不規則名詞は Ns-V-er (44%)、Ns-V-ing person (12%) となり、それぞれ単数形のタイプよりも多く産出される結果となった。また、規則名詞、不規則名詞ともに*V-ing-N- (pl) person という語順の誤りが産出された。被験者の中には一貫してこの形のみを使用する者もいた。

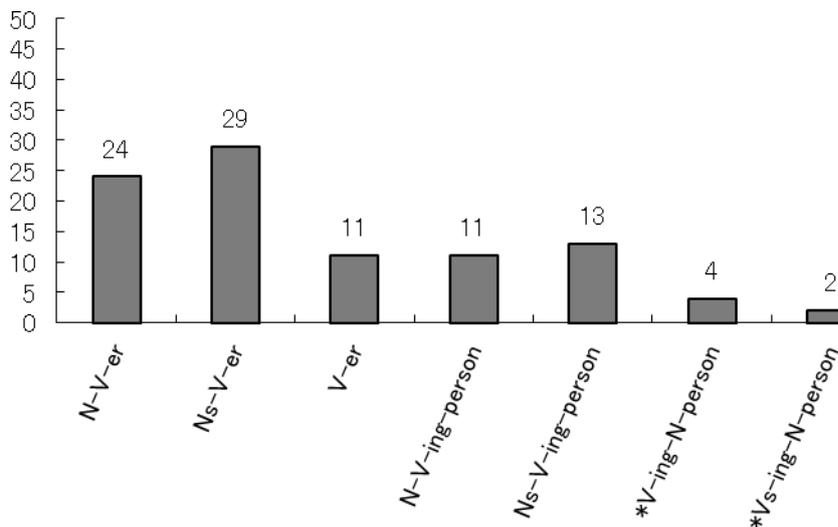


図3 写真の物体が複数（例 猫二匹）の場合の規則名詞のタイプ別産出割合（%）

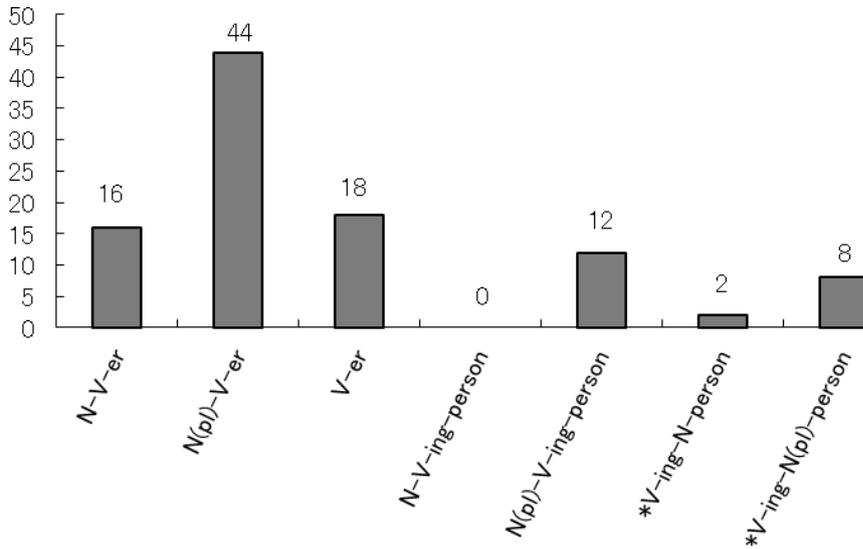


図4 写真の物体が複数（例 猫二匹）の場合の不規則名詞のタイプ別産出割合（%）

3.3 結論

今回の実験を見る限り、日本人英語学習者は複数形規則名詞を産出すると言って良いだろう。また、日本人英語学習者は語順の誤り（例 watching mouse man）を産出することも判明した。

第4章 実験II

4.1 実験の目的

産出タスクの結果から日本人英語学習者は複数形規則名詞を産出すると判断できる。しかし、産出タスクでは複数形規則名詞を含む複合語を産出しなかったとしても、実際に複数形規則名詞を見たら正しいと判断してしまう可能性もある。このような可能性を探るためにも、本実験では単数形規則名詞と複数形規則名詞の両方を出題した文法判断タスクを行い、どのような結果になるのか確かめる。本実験は第5章で紹介する語順の判断タスクと共同に実施している。

4.2 被験者

日本語を母語とする中央大学の学生22名と英語母語話者4名を対象に実験を行った。日本語母語話者の年齢は19歳～22歳で、1ヶ月以上の海外留学経験を持つ者はいなかった。本実験と同時に受けてもらったOxford Placement Testの結果は60問中40～47問正解した

被験者 (Upper Intermediate) が 7 名、30~39 問正解した被験者 (Lower Intermediate) が 13 名、18~29 問正解した被験者 (Elementary) が 2 名いた。OPT の結果は複合語の知識が英語の熟達度と関連性があるのか調べるために本実験の前に被験者に実施した。ただし、Lower Intermediate の 13 名の中で OPT の点数が大きく分かれていたので、今回は (4) のようにレベル分けした。

- (4) グループ A 29~34 問正解 5 名
- グループ B 35~39 点正解 9 名
- グループ C 40~44 点正解 8 名

4.3 実験方法

今回の実験では規則名詞と不規則名詞の複数形が焦点となっており、実験を始める前に単語テストを行い、使用している名詞の単数形と複数形を被験者が正しく書けるかどうか確かめた。単語テストにて正しい答えを書けなかった人は実験結果から排除した。次に本実験の手順を説明する。紙には何かの動作をしている人の写真と英文のコンテキスト、その人物を英語で表した一語が書かれている。被験者にはその英語の一語が文法的に正しいか、正しくないかを 5 段階で評価してもらい、正しくない (-2,-1) を選択した場合は訂正するように求めた。

- (5) 2: 絶対に正しい場合
- 1: どちらかといえば正しい場合
- 0: どちらとも言えない場合
- 1: どちらかといえば間違っている場合
- 2: 絶対に間違っている場合



Here is a person washing dishes.

dishes washer

-2 -1 0 1 2

→ _____

4.4 実験で用いた名詞と動詞

実験は表 4 にある通り、産出タスクで使用した名詞と動詞から八つずつ選んで出題した。全ての複合語は N (pl) + V-er の形を使用し、規則名詞と不規則名詞の両方を調べた。単数形を含む複合語 (例 student-kicker) と複数形を含む複合語 (例 *students-kicker) の両方を出題し、容認率を見ることにした。また、フィラーとしてコンテキストが単数、つまり対

象となる物体や人物が単数の場合の問題も四つ出題した。

表 4 実験Ⅱで使用した名詞と動詞のペア

規則名詞	student-kick, cat-watch, dish-wash, sock rip
不規則名詞	foot-wash, mouse-watch, child-protect, tooth-break

4.5 仮説

日本語を母語とする英語学習者は複数形規則名詞を含む複合語を容認するだろうか。もし非容認とする被験者がいた場合、どの問題であっても一貫して非容認とするのか。また、英語の熟達度の違いに応じて判断タスクの結果にも違いが生じるだろうか。ここではこれらの問題について仮説を立てることとする。

まず、産出タスクで複数形規則名詞を含む複合語を産出したことから、

仮説 1：複数形規則名詞を容認する人が大多数である。

次に、複数形規則名詞を含む複合語を非容認とできている人がいたとしても、

仮説 2：一貫して全問正解できる人はいない。

また、被験者間の英語の熟達度と判断タスクの結果の関係性については、

仮説 3：全体を通して正解率が高い被験者は OPT の結果も良い。

と予想される。また複数形規則名詞を含む複合語の容認率が高い結果となったとしても、

仮説 4：規則名詞よりも、不規則名詞の方が複数形を容認する割合が高い。

と仮説を立てる。

4.6 結果

まず日本語母語話者と英語母語話者の容認率の結果を比較し、詳しい容認数の内訳、OPT のレベル別容認率、日本語母語話者の問題別平均値を紹介する。

4.6.1 英語母語話者と日本語母語話者の全体結果

図 5 は英語母語話者と日本語母語話者の規則名詞の複合語の容認率を示している。まず、英語母語話者は単数形の場合のみを容認する結果となり、複数形規則名詞を容認する被験者は現れなかった。一方日本語母語話者は、英語母語話者に比べて単数形と複数形どちらも高い割合で容認している。また単数形規則名詞の容認率は 65%、複数形規則名詞の容認率は 80%となり、複数形規則名詞を含む複合語の容認率の方が高い結果となった。つまり、

*students-kicker のような形が容認されたことになり、レベル順序付けモデルの制約が働いていないと言える。まとめると英語母語話者は単数形のみを容認する一方で、日本語母語話者は複数形の方が容認する割合が高く、全く逆の傾向が見られる。

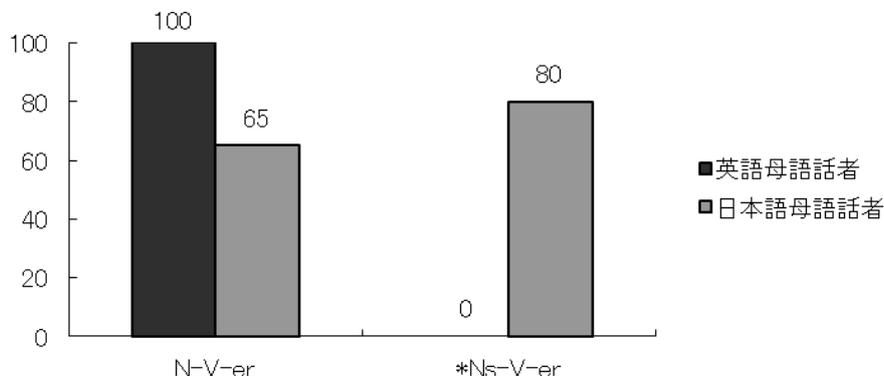


図5 英語母語話者と日本語母語話者の単数形規則名詞を含む複合語と複数形規則名詞を含む複合語の容認率 (%)

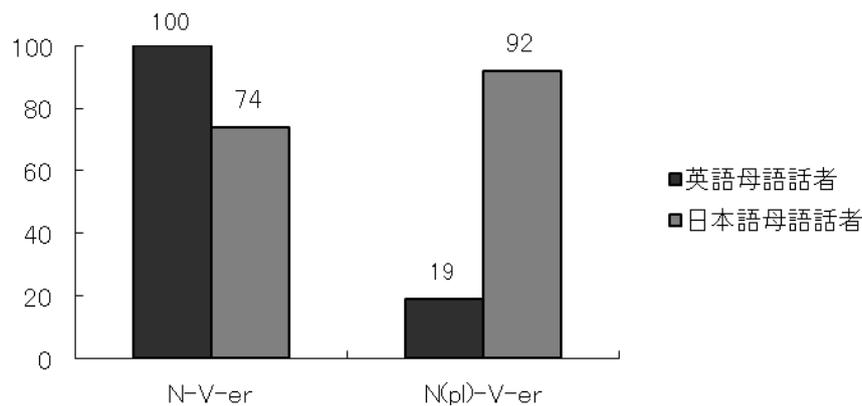


図6 英語母語話者と日本語母語話者の単数形不規則名詞を含む複合語と複数形不規則名詞を含む複合語の容認率 (%)

図6は英語母語話者と日本語母語話者の不規則名詞の複合語の容認率を示している。まず、英語母語話者では圧倒的に単数形での使用を容認する割合が高く、複数形の容認率は非常に低かった。一方で日本語話者の場合、単数形不規則名詞の容認率は74%、複数形不規則名詞の容認率は92%で共に高い容認率となった。特に複数形不規則名詞は複数形規則名詞よりも高い容認率となり、この二つを区別して扱っているのではないだろうか。規則名詞と同様に英語母語話者と日本語母語話者では全く逆の結果となり、日本語母語話者は複数形不規則名詞を含む複合語の方が容認しやすい傾向にある。

4.6.2 日本語母語話者の詳細結果

表5 日本語母語話者の複数形規則名詞と複数形不規則名詞の容認人数
(合計人数 22名)

	複数形規則名詞 (例 *students kicker)	複数形不規則名詞 (例 feet washer)
4題全て容認	12名	18名
4題中3問容認	6名	1名
4題中2問容認	1名	3名
4題中1問容認	3名	0名
容認なし	0名	0名

次に表5で示されている複数形規則名詞と複数形不規則名詞を含む複合語の容認人数を比較する。まず、複数形規則名詞の容認率の被験者別結果を見ると、一貫して4題全てを容認した被験者は22人中12人、三つ容認した被験者は6人、二つ容認した被験者は1人、一つ容認した被験者は3人、容認しなかった人は0人となった。つまり一貫して複数形規則名詞を非容認とし、正解できた被験者は0人であった。一方、複数形不規則名詞は18人が4題全てを容認し、複数形規則名詞と複数形不規則名詞を比べると、全て容認した人数にかなりの差が出た。つまり、全体的に複数形規則名詞よりも複数形不規則名詞のほうが容認されやすい結果となり、このことから被験者がこの二つを区別して認識していると言える。これは二重機構モデルを支持する特徴である。

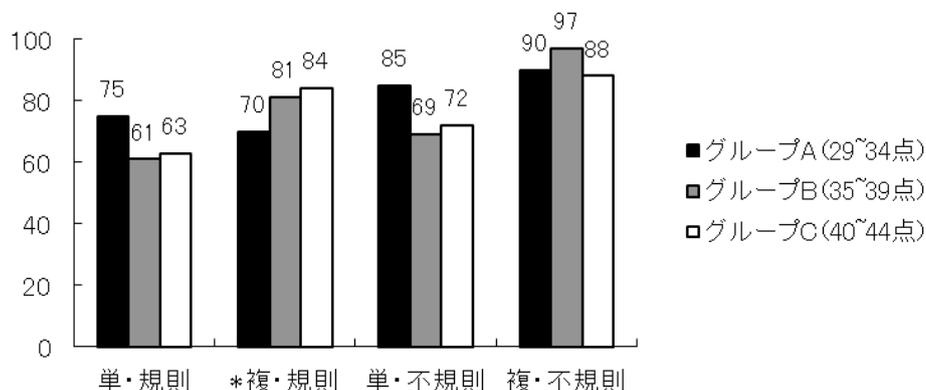


図7 OPT レベル別の規則名詞と不規則名詞の容認率 (%)

図7には被験者別の正解数とOPTの結果がまとめてある。本実験と同時に受けてもらったOxford Placement Testの結果を基に三つのグループに分けて比較した。グループAは29~34点、グループBは35~39点、グループCは40~44点獲得した3グループである。

ここでの問題は、英語の熟達度と複合語の正しい認識に何か関連性があるのかというこ

とだ。まず、ここで注目したい複数形規則名詞の結果だが、OPTの結果が良くない被験者の容認率が最も低い結果となり、OPTの結果が良くなるにつれて容認率が高くなった。つまり正解率で言えばグループAの被験者が最も高いということになる。これは予想と反する結果である。単数形規則名詞でもやはりグループAの容認率が最も高かった。以上の結果から、OPTで測ることができる英語の熟達度と複合語の正しい認識には相関関係がないと考えられる。



図8 日本語母語話者の単数形規則名詞を含む複合語の問題別平均値

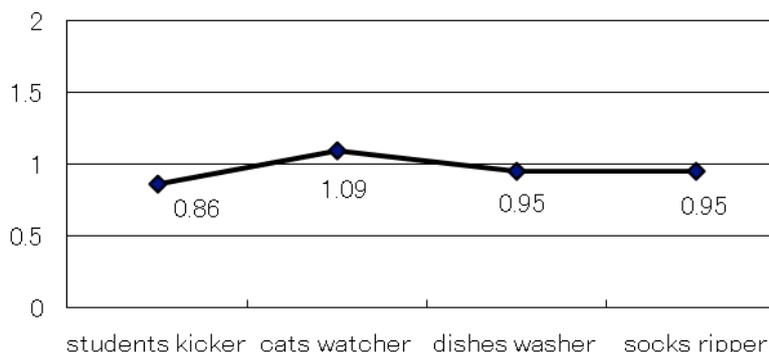


図9 日本語母語話者の複数形規則名詞を含む複合語の問題別平均値

図8、9は日本語母語話者の規則名詞の問題別平均値を示している。単数形規則名詞、複数形規則名詞ともに平均値は全てプラスの数値となった。特に複数形規則名詞を含む複合語の平均値は単数形規則名詞を含む複合語よりも高い結果であった。また、複数形規則名詞の場合、4問の平均値に大差は見られないが、単数形規則名詞では問題ごとに差が見られた。特にstudent kickerの平均値が一番平均値が高かったdish washerに比べて非常に低く、0.13であった。



図 10 日本語母語話者の単数形不規則変化を含む複合語の問題別平均値

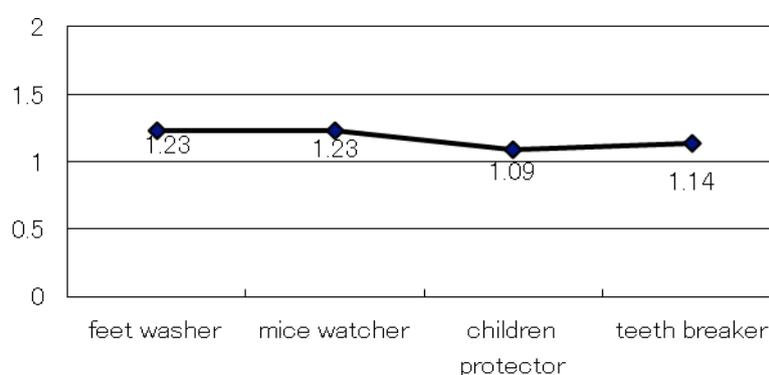


図 11 日本語母語話者の複数形不規則変化を含む複合語の問題別平均値

図 10、11 は日本語母語話者の不規則名詞の問題別平均値を示している。単数形不規則名詞では 4 問も平均値に大きな差が見られ、特に **child protector** は平均値 0 で他の問題に比べて低かった。一方、複数形不規則詞では 4 問全てが 1.0 以上の数値となり、非常に高い割合で容認されている。

4.7 議論

まず、実験結果を受けて仮説の検証を行う。上記の実験結果より、日本語母語話者は複数形規則名詞を含む複合語を容認することが明らかになった。特に 4 問全てを容認した被験者が半数であったことから、仮説 1「複数形規則名詞を容認する人が大多数である。」は支持することができる。次に仮説 2「全問正解できる人はいない。」だが、これは一貫して複数形規則名詞を非容認とする人が 0 人だったことから支持できる。今回、規則名詞を含む複合語について大きく分けて次の三つのタイプが見られた。

- (6) i. 単数形 (例 **cat watcher**)、複数形 (例 **cats watcher**) の両方を容認する。
- ii. 複数形は容認するが、単数形は容認しない。
- iii. 複数形は容認できないが、単数形は容認する。

被験者の半数以上は i、ii に該当し、どちらのタイプも複数形規則名詞を容認している。一方で iii は複数形規則名詞を正しくないと判断できた数少ない被験者である。ただし、複数形規則名詞を単数形に直すことができた被験者は少なかった。例えば被験者の中には *cats-watcher を非容認と判断できた人がいたが、訂正内容は *watching cats man や *cats watching man のような形で結果的に複数形を使用している形が非常に多かった。これらの結果から日本人英語学習者には「複合語の中で規則名詞を複数形にできない」という知識が働かないと言える。被験者の中には *dishes washer, *students washer を非容認とし、さらに正しく訂正できる被験者が数名いたが、その全員が *cats watcher, *socks ripper は容認しているという特徴が見られた。その理由として写真の影響が挙げられる。例えば「男性が複数の皿を洗っている」というコンテクストがある。写真の中の流し台には数枚の皿が置かれているのだが、実際に男性が手に持って洗っている皿は一枚だけである。これが単数に訂正した理由ではないだろうか。もしこのような理由で複数形を非容認としたのならば、実質的には iii に該当する被験者も複数形を容認していると判断できる。よって日本語母語話者は複数形規則名詞を容認し、レベル順序付けモデルの制約を受けないと結論付ける。次に仮説 3「全体を通して正解率が高い被験者は OPT の結果も良い」だが、OPT の結果が良くても本実験の正解率が低い被験者がいたことから、この仮説は正しくない。仮説 4「規則名詞よりも、不規則名詞の方が複数形を容認する割合が高い。」は複数形規則名詞 (80%)、複数形不規則名詞 (92%) という結果から支持できる。これにより日本語母語話者は規則名詞と不規則名詞を区別して扱っていることが明らかになった。よって日本語母語話者にも二重機構モデルが適応されると結論付けることが出来る。

以上の結果から、日本語母語話者の言語システムの中には、複合語の中で規則名詞を複数形に出来ないというルールが存在しないと言える。今回の被験者の場合、写真の中の対象となる物体や人間が複数ならば、単純に名詞を複数形にする (例 students kicker) という傾向が見られた。この学習者の行動は今まで学習してきたことの過剰一般化、つまり、「昨日リンゴを二つ食べた」という文章の場合、I ate two apples yesterday. とするように学習してきたことが、複合語でも同じようにルールとして認識されているからではないだろうか。先行研究 (Gordon, 1985; Clahsen, 1995) では、母語話者と第二言語話者の両方にレベル順序付けモデルの制約が働くと主張し、それは「形態素習得の初期段階から存在する」(Clahsen, 1995, p.136) とある。しかし、実験結果では母語話者のみに制約が働くこととなり、この主張は支持されなかった。もし過剰一般化の考えが正しいとすれば、第二言語学習者はレベル順序付けモデルの制約を生得的に受けているのではなく、その後の学習段階で取り入れていくものであると言える。

4.8 結論と今後の課題

本研究では日本語母語話者が複数形規則名詞を含む複合語を容認するのか文法判断タスクによる調査を行ない、レベル順序付けモデルの制約の有無を明らかとした。その結果、被験者全員が最低一つでも複数形規則名詞を含む複合語を容認したため、日本人英語学習

者にレベル順序付けモデルの制約は働かないという結論に達した。また規則名詞と不規則名詞の複数形容認率を比べると、不規則名詞を含む複合語の方が高いことから、日本人英語学習者はこの二つを何らかの知識により区別して扱っており、二重機構モデルを支持することができた。また、英語母語話者に関しては単数形規則名詞のみを容認する結果となり、先行研究と同じく母語話者にはレベル順序付けモデルの制約が働くと言える。

今回の実験は大学生を対象に行ったが、英語母語話者に近いレベルの日本語母語話者への調査を行うことで、レベル順序付けモデルの制約がどの程度の言語知識を必要とするのか調べたい。

第5章 実験Ⅲ

5.1 実験の目的

産出タスクで *watching mouse man, protect baby man* といった語順の誤りを含む複合語が多く産出された。そこで、判断タスクを実施し、正しい語順と間違った語順の両方を与えた場合はどのような判断をするのか検証する。

5.2 被験者

本実験は実験Ⅱの問題と共同で実施し、被験者も実験Ⅱと同様である。日本語を母語とする中央大学の学生 22 名と英語学習者 4 名を対象に行った。本実験と同時に受けてもらった Oxford Placement Test の結果は 60 問中 40~47 問正解した被験者 (Upper Intermediate) が 7 名、30~39 問正解した被験者 (Lower Intermediate) が 13 名、18~29 問正解した被験者 (Elementary) が 2 名であった。ただし、Lower Intermediate に割り振られる 13 名は OPT の点数が大きく分かれていたので、今回は (7) のようにレベル分けした。

- (7) グループ A 29~34 問正解 5 名
- グループ B 35~39 点正解 9 名
- グループ C 40~44 点正解 8 名

5.3 実験方法

紙に何かの動作をしている人の写真と英文のコンテキスト、その人物を英語で表した一語が書かれている。被験者にはその英語の一語が文法的に正しいか、正しくないかを 5 段階で評価してもらい、正しくない (-2,-1) を選択した場合は訂正するように求めた。

- (8) 2 : 絶対に正しい場合
- 1 : どちらかといえば正しい場合
- 0 : どちらとも言えない場合
- 1 : どちらかといえば間違っている場合
- 2 : 絶対に間違っている場合



Here is a person cleaning a shoe.

cleaning shoe man

-2 -1 0 1 2
→ _____

5.4 実験で用いた名詞と動詞

産出タイプで使用した名詞と動詞を判断タスクでも出題した。語順のタイプは産出タスクで産出率が多かったものを使用した。ただし、*V-er-N、V-N-person に関しては産出が見られなかったが、正しくない語順をどのように判断するのか確かめるために出題した。実験では、表 6 にある名詞と動詞のペアを表 7 に示す 5 パターンの語順で出題した。名詞と動詞のペア (8 組) × 語順 (5 パターン) で合計 40 問となる。

表 6 使用した名詞と動詞のペア

規則名詞	baby-protect, bone-break, shoe-clean, hand-wash
不規則名詞	mouse-watch, foot-wash, tooth-break, child-protect

表 7 出題した語順のタイプ

	語順タイプ	例
タイプ 1	N-V-er	<i>baby protector</i>
タイプ 2	*V-er-N	<i>protector baby</i>
タイプ 3	N-V-ing-person	<i>baby protecting man</i>
タイプ 4	*V-ing-N-person	<i>protecting baby man</i>
タイプ 5	*V-N-person	<i>protect baby man</i>

5.5 仮説

本実験を行うにつき、産出タスクの結果を参考に以下の仮説を立てた。

仮説 1: 英語母語話者、日本語母語話者ともに N-V-er の容認率が一番高い。

仮説 2: 日本語母語話者の中には *V-ing-N-person と N-V-ing-person の両方を容認する被験者がいる。

仮説 3: OPT のレベルが高い被験者は語順の誤りも正しく認識できる。

5.6 結果

5.6.1 英語母語話者と日本語母語話者の全体結果

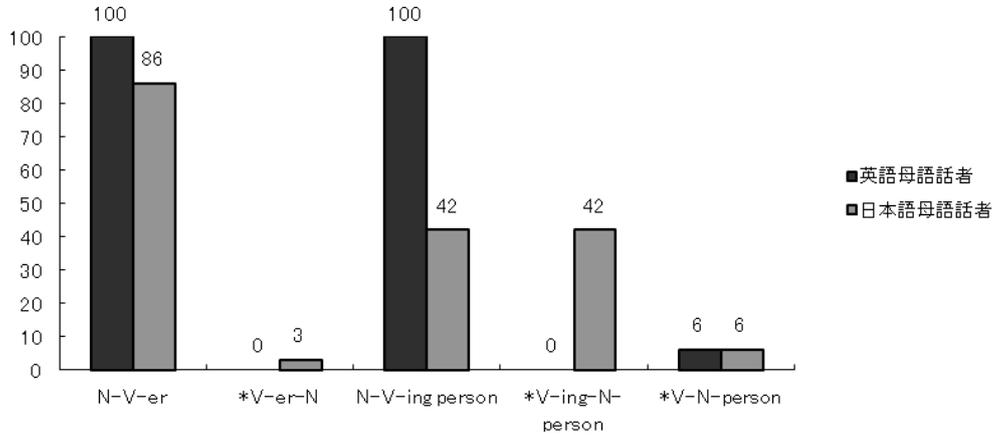


図 12 英語母語話者と日本語母語話者の規則名詞のタイプ別容認率 (%)

図 12 は英語母語話者と日本語母語話者の規則名詞のタイプ別容認率を表している。英語母語話者の場合、被験者全員が N-V-er (例 baby protector)、N-V-ing-person (例 baby protecting man) を容認し、非文法的な語順である *V-er-N (例 *protector baby)、*V-ing-N-person (例 *protecting baby man) を容認する被験者はいなかった。日本語母語話者の場合、N-V-er の容認率が最も高く 86% だった。しかし、英語母語話者が全員容認していた N-V-ing person の容認率は半数にも満たなかった。*V-ing-N-person は非文法的な語順にも関わらず 42% の容認率であった。一方で、*V-er-N、*V-N-person はそれぞれ 3%、6% で非常に低い容認率となり、ほとんどの被験者が正しい知識を持っていると言える。

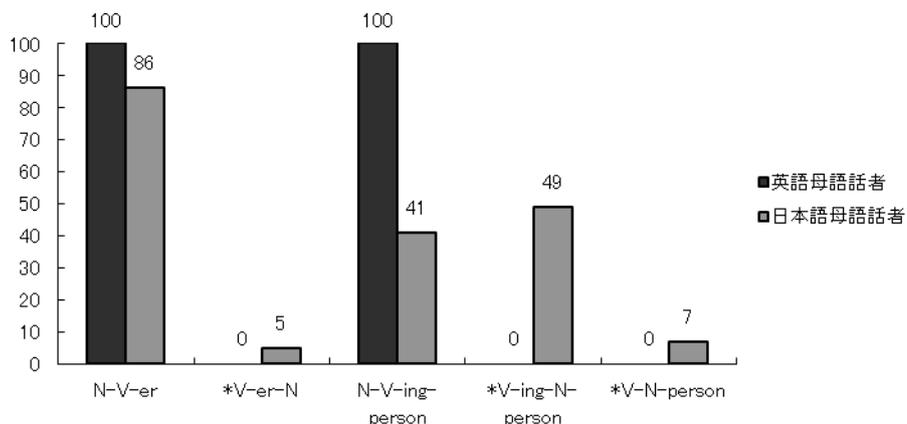


図 13 英語母語話者と日本語母語話者の不規則名詞のタイプ別容認率 (%)

英語母語話者の正解率は 100% で、非文法的な語順の複合語を容認する被験者はいなかつ

た。日本語母語話者の結果は、N-V-er の容認率は 86%と高く、*V-er-N の容認率は非常に低かった。英語母語話者と比べて大きな違いがみられたのが、N-V-ing-person と *V-ing-N-person の容認率だった。規則名詞と同様に非文法的な語順の *V-ing-N-person が半数の割合で容認される結果となった。全体的に規則名詞の場合とタイプ別容認率に大きな違いは見られなかった。

5.6.2 日本語母語話者の詳細結果

次に被験者の詳しい結果と訂正内容を紹介する。ほとんどの被験者は規則名詞と不規則名詞で同じような傾向だったため、ここでは規則名詞を中心に解説する。まず、N-V-er は 22 名中 1 名のみ非容認とし、5 名が 1、2 問を分からないと判断していたが、残りの被験者は 4 問全て容認としていた。非容認とした 1 名は *protecting baby man* といった全く異なる形に訂正する傾向が見られた。続いて、N-V-ing-person を一貫して非容認とした人は 6 名、一貫して容認とした被験者は 4 名のみであった。非容認とした 6 名のうちの半数は *V-ing-N-person も正しくないと答えており、容認とした 4 名のうちの半数は *V-ing-N-person も正しいと認めている。つまり両方のタイプを認める被験者と、どちらのタイプも認めない被験者が見られた。語順が正しくないタイプの *V-ing-N-person を一貫して非容認とする被験者は 9 名いたが、N-V-ing-person と訂正した被験者は 1 名のみで、他は *man-V-ing N* といった形に訂正する回答が多く見られた。

表 8 規則名詞と不規則名詞の訂正内容

	語順タイプ	訂正内容 (産出が多い順)	例
タイプ 1	N-V-er	N-V-ing person	<i>shoe cleaning man</i>
タイプ 2	*V-er-N	N+V-er	<i>shoe cleaner</i>
タイプ 3	N-V-ing-person	*V-ing-N-person Person V-ing-N N-V-er	* <i>cleaning shoe man</i> <i>man cleaning shoe</i> <i>shoe cleaner</i>
タイプ 4	*V-ing-N-person	person-V-ing-N N-V-er N-V-ing-person	<i>man cleaning shoe</i> <i>shoe cleaner</i> <i>shoe cleaning man</i>
タイプ 5	*V-N-person	*V-ing-N-person N-V-ing-person person-V-ing-N	* <i>cleaning shoe man</i> <i>shoe cleaning man</i> <i>man cleaning man</i>

今回の実験では規則名詞、不規則名詞共に N-V-er と *V-er-N は容認率に約 80%の差があるということが示され、日本人英語学習者は *V-er-N は誤った語順であるという知識を身につけていると言える。しかし N-V-ing-person と *V-ing-N-person の場合は容認率に大差がな

かった。また*V-ing-N-personと同じV+Nの語順であるにも関わらず、*V-N-personは容認率が非常に低いということも判明した。*V-N-personの容認率が低かった理由は訂正によって明らかとなった。ほとんどの被験者が*V-N-personの語順の誤りを訂正するのではなく、単純にVに-ingを付加した形に訂正しており、どちらにしても語順の誤りを正しくできる被験者はいなかった。

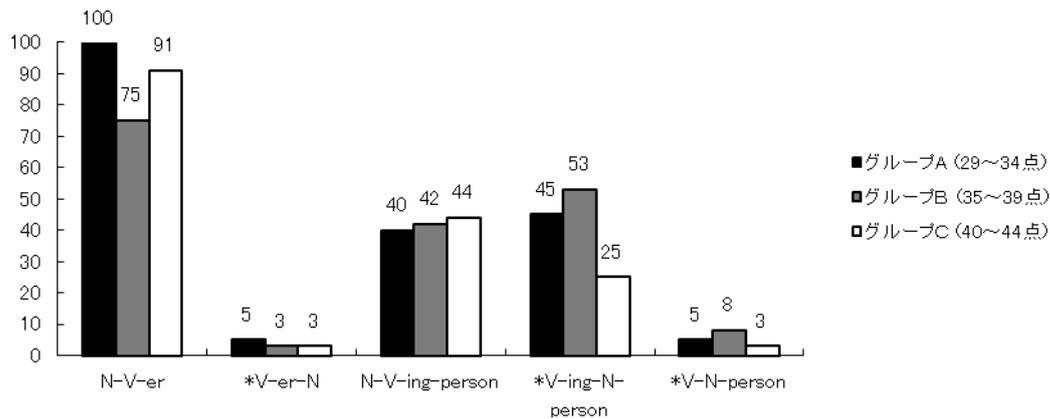


図 14 OPT レベル別の規則名詞容認率 (%)

ここでは語順に関する知識とOPTのレベルに相関関係があるか、あるとすればどのような特徴が見られるのか検証する。図14はOPTのレベル別容認率で、グループCがOPTの結果が最も高いグループである。N-V-erはレベルに関係なく容認率が非常に高かった、特にグループAの容認率が100%であることは非常に興味深い。*V-er-N、*V-N-personは予想通りの結果で、どのグループも非文法的な語順だと理解しているようだ。N-V-ing-personはグループ間の大きな差はなく、OPTの結果との相関関係も見られなかった。*V-ing-N-personはグループBの容認率が最も高く、相関関係はなさそうだ。ただしグループCが25%で他のグループに比べて容認率が非常に低かった。

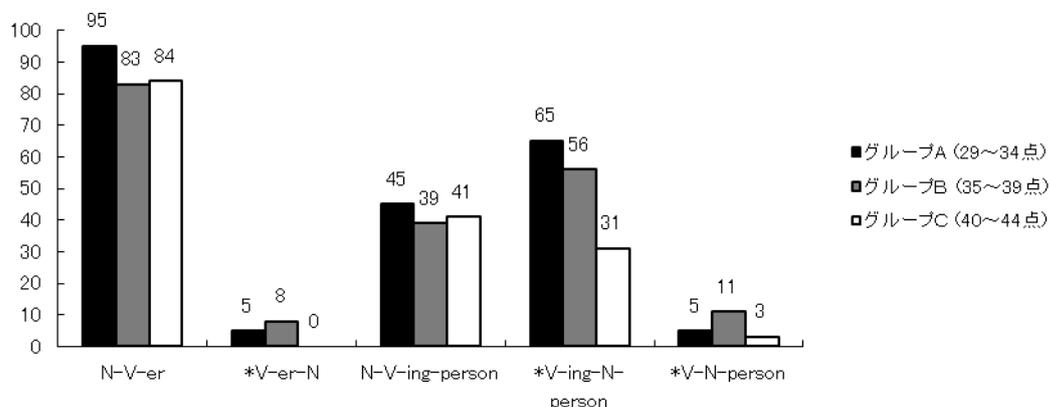


図 15 OPT レベル別の不規則名詞容認率 (%)

次に図 15 で不規則名詞の容認率と OPT との関係を見る。***V-ing-N-person** は OPT の結果が良くなるにつれて容認率が低くなる傾向が見られた。つまり英語の熟達度が高いほど正解率も高くなっており、グループ A と C では 34% の差が見られた。よって ***V-ing-N-person** に関しては相関関係があると考えられる。他のタイプは規則名詞と同様の傾向が見られた。

5.7 議論

以上の実験結果をもとに仮説の検証をする。規則名詞、不規則名詞ともに OPT のレベル関係なく **N-V-er** は容認されていたことから、仮説 1 「英語母語話者、日本語母語話者ともに **N-V-er** の容認率が一番高い。」は支持できる。仮説 2 「日本語母語話者の中には ***V-ing-N-person** と **N-V-ing-person** の両方を容認する被験者がいる」は規則名詞、不規則名詞ともにこの仮説に当てはまる被験者がいたため支持できる。次に仮説 3 「OPT のレベルが高い被験者は語順の誤りも正しく認識できる」に関してだが、OPT のレベルが最も高かったグループが ***V-ing-N-person** の容認率も低いということが分かっただけで、他のタイプでは明白な関係性が見られなかった。従って、仮説 3 は支持できない。

本実験において被験者間で一番差が見られたタイプは **N-V-ing-peron** と ***V-ing-N-person** であった。特に ***V-ing-N-person** を一貫して容認した被験者が多かったがこれは英語母語話者には見られない形である。なぜこのような語順の誤りをしてしまうのだろうか。まず、日本語の複合名詞について考えてみる。日本語の複合名詞は少なくとも次の表 9 に示した 3 種類が挙げられる。

若林 (2008) によると、パターン 1, 2, 3 のいずれも語順は N (目的語) + V (主要部) + MAN となっており、英語の語順 (例 truck driver) と同じである。従って、母語の語順をそのまま中間言語に転移しても正しい形が使われるはずである。

表 9 日本語の複合名詞 (若林, 2008)

パターン 1 漢語	N (目的語) + V (主要部) + 者・士・手など	例 土地所有者 天気予報士 トラック運転手
パターン 2 和語	N (目的語) + V (主要部) + 人	例 花盗人
パターン 3 外来語	N (目的語) + V-er	例 タクシードライバー 長距離ランナー

しかし、今回の文法判断タスクで *V-ing-N-person が容認されたことから、英語の複合名詞の使用に母語の影響はないと考えられる。おそらくこれらの語順の間違ひは英語の述部の語順をそのまま複合名詞で使用したために起こったのだろう。例えば “Here is a person who protects a baby.” の protects a baby の部分に is protecting a baby を置き換えても自然な文章になることが、転移しても良いと考えた理由ではないだろうか。その結果、protect に-ing を付加し、さらに man / womanなどを付加して使用すると語順の誤りが起きると考えられる。*V-ing-N-person と似た形の *V-N-person にも同様の傾向が見られた。この考えが正しいければ、*V-er-N が正しくないと判断できた被験者が多いのは、上記で述べたような述語からの転移ができないからだと考える。つまり、“Here is a person who protects a baby” の protects a baby の部分に protector a baby を当てはめたら非文法的な文章になる。これが *V-er-N が容認されない理由だと考える。

結論

本研究では複合名詞の語順の誤りを日本語母語話者が正しく認識できているかどうかを検証した。結果は、日本人英語学習者は英語学習者が一人として容認しなかった語順の誤り、特に *V-ing-N-person を非常に高い割合で容認することが判明した。正しい語順の N-V-ing-person も容認率が 50%弱で正しく判断できた被験者は少なかった。また、N-V-ing-person と *V-ing-N-person の両方を容認する、もしくは非容認する被験者が多いなど被験者別にさまざまなタイプが見られたが、OPT のレベルとの関連性は低いと考えられる。

日本語母語話者が英語母語話者は認めない語順を認めてしまった理由は母語の転移ではなく、述語からの転移といった学習者の中間文法が引き起こした結果ではないかと考えられる。

参考文献

- Clahsen, H. German plurals in adult second language development: Evidence for a dual-mechanism model of inflection. In L. Eubank, L. Selinker and M. Sharwood Smith (eds.) . *The current state of interlanguage: Studies in honor of William E. Rutherford*. Amsterdam: John Benjamins, 1995.
- Gordon, P. Level ordering in lexical development. *Cognition*, 21, 73-93, 1985.
- Lardiere, D. L2 acquisition of English synthetic compounding is not constrained by level-ordering (and neither, probably, is L1) . *Second Language Research*, 11, 20-56 ,1995.
- Victoria A. Murphy. Level-Ordering and Dual-mechanisms as Explanations of L2 Grammar, E.Hughes et al. (eds.) , BUCLD 21 Proceedings, 410-421, 1997.
- Victoria A. Murphy. Compounding and the Representation of L2 Inflectional Morphology . *Language Learning* , pp153-197, 2000.

若林茂則『日本語を母語とする英語学習者による複合名詞の産出』、（基盤研究（C））
研究成果報告書、125-144、2008年。

中央大学文学部英米文学会会則

昭和 57.11.18
改正平成 2.5.11
改正平成 16.5.11

(名 称)

第 1 条 本会は中央大学文学部英米文学会(略称、中大英米文学会)と称する。

(目 的)

第 2 条 本会は英米の文学・語学、および関係諸学科の研究ならびに研究発表を行い、会員相互の親睦交流を図ることを目的とする。

(事 業)

第 3 条 本会は前条の目的を達成するために研究会、講演会、親睦会等を開催し、機関誌を随時発行する。

(会員資格)

第 4 条 本会は中央大学文学部英語文学文化専攻の専任教員、学部・大学院の在学生および卒業生を会員とする。

(会 費)

第 5 条 本会の会費は無料とする。なお、会計年度は4月1日にはじまり、翌年の3月31日をもって、おわるものとする。

(役 員)

第 6 条 本会は役員として、会長1名、教員幹事1名、大学院生幹事若干名、学部学生幹事若干名、卒業生幹事若干名をおく。

第 7 条 会長は教員の中から幹事会が推薦し総会で承認する。

第 8 条 教員幹事は教員会員の中から互選する。

第 9 条 大学院生幹事は大学院生会員の中から互選する。

第 10 条 学部学生幹事は学部学生会員の中から互選する。

第 11 条 卒業生幹事は卒業生会員の中から互選する。

第 12 条 幹事は幹事会を組織して、会務を執行する。

第 13 条 役員任期は1年とする。ただし再任をさまたげない。

第 14 条 幹事は次の事務を分担する。 1. 庶務 2. 会計 3. 渉外 4. 編集

(総 会)

第 15 条 本会は年一回総会を開く。総会は会長が招集する。

第 16 条 総会において幹事は前年度の事業報告および会計報告、またその年度の事業計画および予算案を発表する。

(議 決)

第 17 条 総会の議決は出席会員の過半数をもって成立する。

第 18 条 本会の会則の変更は総会の議を経なければならない。

第 19 条 本会は事務所を中央大学文学部英語文学文化共同研究室におく。

第 20 条 本会則は昭和 57 年 11 月 18 日から施行する。

研究室動向

◆大田美和教授は、2010年4月から中央大学在外研究員制度により半年間ケンブリッジ大学（イギリス）で19世紀イギリス文学について研究されました。帰国後、現在も研究に専念されています。

英語文学文化専攻専任教員

青木 和夫	(あおき かずお)	大田 美和	(おおた みわ)
オニキ ユウジ	(おにき ゆうじ)	河西 良治	(かさい りょうじ)
兼武 道子	(かねたけ みちこ)	小林 恵昭	(こばやし よしあき)
高尾 直知	(たかお なおちか)	丹治 竜郎	(たんじ たつろう)
中尾 秀博	(なかお ひでひろ)	堀田 隆一	(ほった りゅういち)
藤平 育子	(ふじひら いくこ)	John Matthews	(ジョン マシューズ)
若林 茂則	(わかばやし しげのり)		

編集後記

本号では、2名の教員による査読審査を経て、5本の学部卒業論文が掲載された。今後も、多岐に渡る研究成果の発表の場として、そして自主的な研究の発表の場として、本論文集が積極的に活用されることを願っている。

(編集一同)

英米文学研究（第 28 号）

2010 年 12 月 24 日 発行

発行人 中央大学文学部英米文学会
代表者 小林 恵昭
事務局 〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1 / 中央大学文学部
英語文学文化共同研究室内 / 電話 042 (674) 3747
振替口座 東京 7=32447 「中大英米文学会」
印刷者 中央大学生生活協同組合出版局
電話 042 (674) 3018
